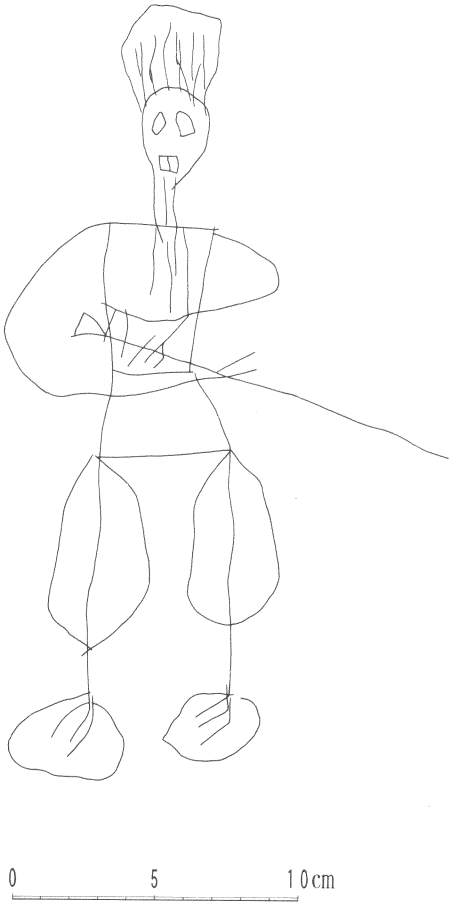
樹葉や樹木を表現した線刻壁画は善通寺市内や坂出市の古墳にも多く確認されており、その意味の解明が注目される。

線刻画③～⑤：３人の武人　奥壁の壁画群と共に特筆できる線刻画が玄室西壁最下段中央（線刻画④）にも描かれている。細い優美な曲線と力強い直線で描かれた太刀佩きの武人図である。奥壁の石材と比較してこの絵が描かれた石材は一面に凹凸があるが、無駄な線や描き損じの線などは全く認められない。石材への線刻にかなり手慣れた人物により描かれたようである。

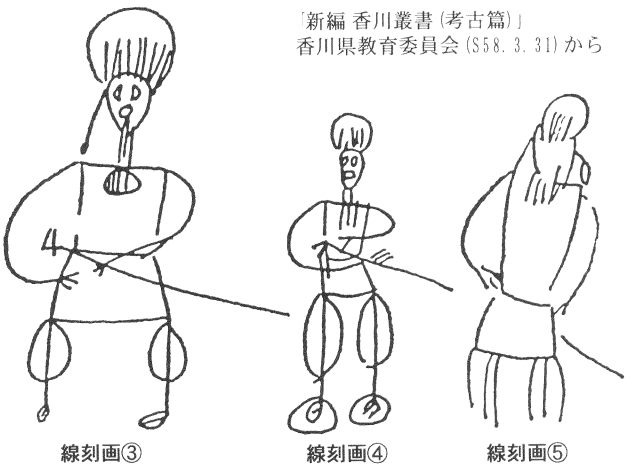
武人は恐ろしげな顔面、頭部には髷か帽子が表現されている。胸元には髭か首飾りらしい表現も認められる。また、腰にはベルトを絞め、両手は腰の太刀に触れている。太刀は柄頭が逆三角形に膨らみ、頭椎太刀か環頭太刀のような装飾が施されたものであることが判る。左手の指の間には鍔らしい表現もある。

上着は股くらいの高さで直線的に終わり、下には裾を絞ったズボンを穿き、足元には沓か下駄が丸く表現されている。素晴らしい表現力である。

また、発見当時の調査では玄室西壁中段の奥壁側と羨道西壁の開口付近の最下段にもよく似た武人が描かれていたことが当時の資料から判るが、現在では樹脂で覆われているため細部の観察はできない。



第37図　玄室西壁武人画実測図①



第38図　玄室西壁武人画実測図②

参考文献

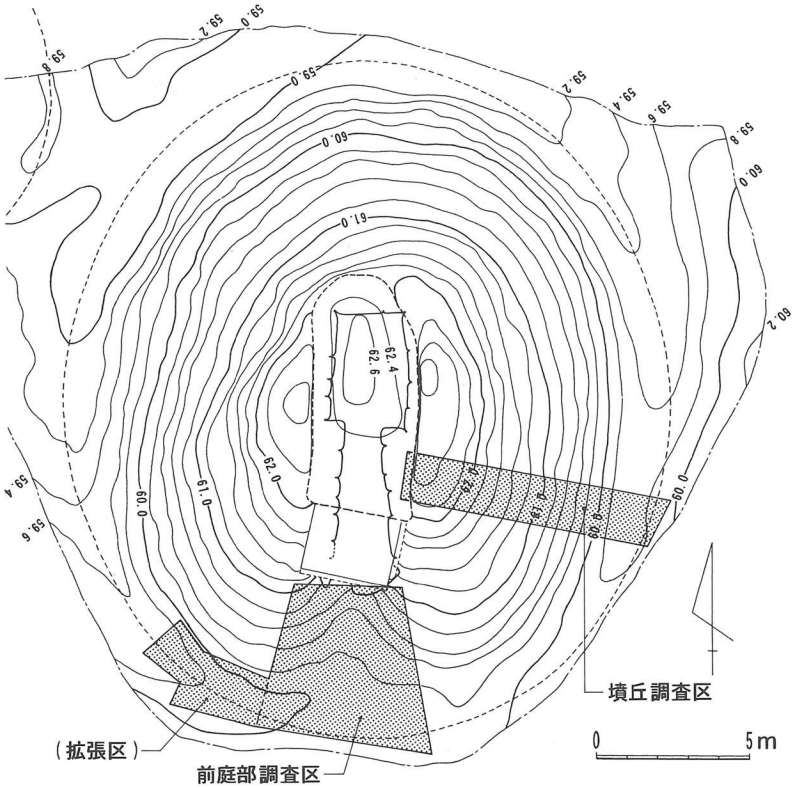
「香川県宮が尾古墳調査概報」　松本豊胤　（古代学研究第45号　1966年９月）
「日本装飾古墳の研究」　斉藤　忠　（講談社　1973年２月）
「新編香川叢書考古篇」　香川県教育委員会　（1983年３月）
「善通寺宮が尾古墳の線刻壁画」　丹羽佑一　（教育香川　S59年夏期号）

②前庭部から羨道部にかけての発掘調査

平成７年度の宮が尾古墳での発掘調査は埋没している前庭部から着手した。調査の目的は、これまで知られていない前庭部から羨道にかけての遺構や遺物の検出、また開口部を復元する際の基礎資料を得ることが目的であった。

まず作業の妨げとなる覆屋を解体し、崩落している天井石を除去した。そして前庭部に調査区を設定し掘削を開始したところ、羨道から直線的に延びる幅２ｍ程の平坦な墓道状の遺構が検出された。

この遺構上の開口部付近には壁面から崩落したとみられる比較的大きな石材が折り重なるように堆積しており、石材の下からは須恵器片やガラス玉が多数出土した。また、開口部付近で遺構面が強い火で焼けた部分が確認されたが、この周囲から出土したガラス玉数点が溶けて変形しており、須恵器片にも焼けて変色したものが認められた。この場所からは人のものと思われる骨片も多数出土したが、まだ分析は行っておらず詳細は不明である。



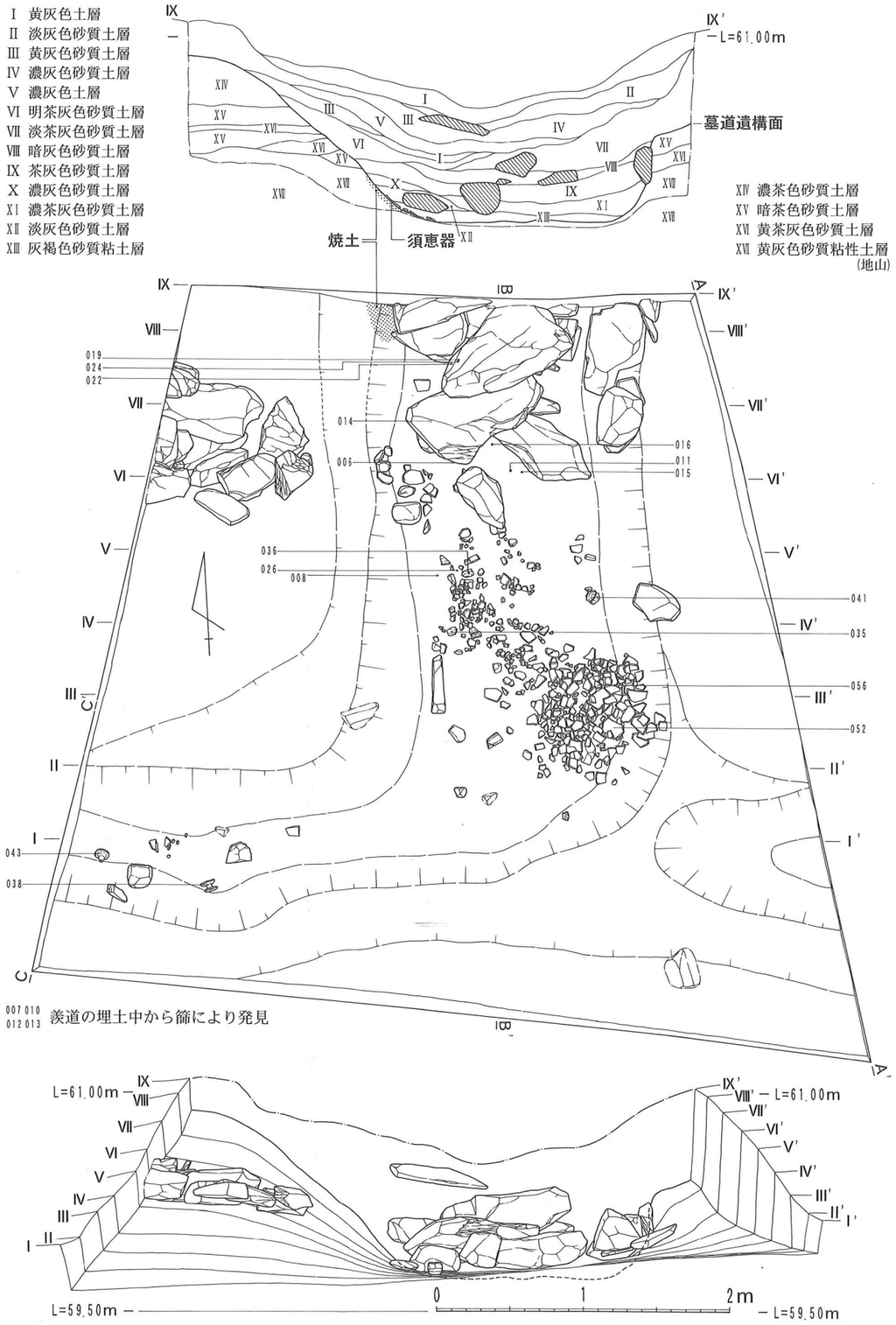
第39図　宮が尾古墳調査区配置図

そして、多量の炭化物がここから墓道一帯の遺構面直上に薄く堆積し、数箇所に土器溜りが認められた。この炭化物はこの焚火により生じたようであるが、石室内部の焚火の跡との関連も考える必要があるかも知れない。

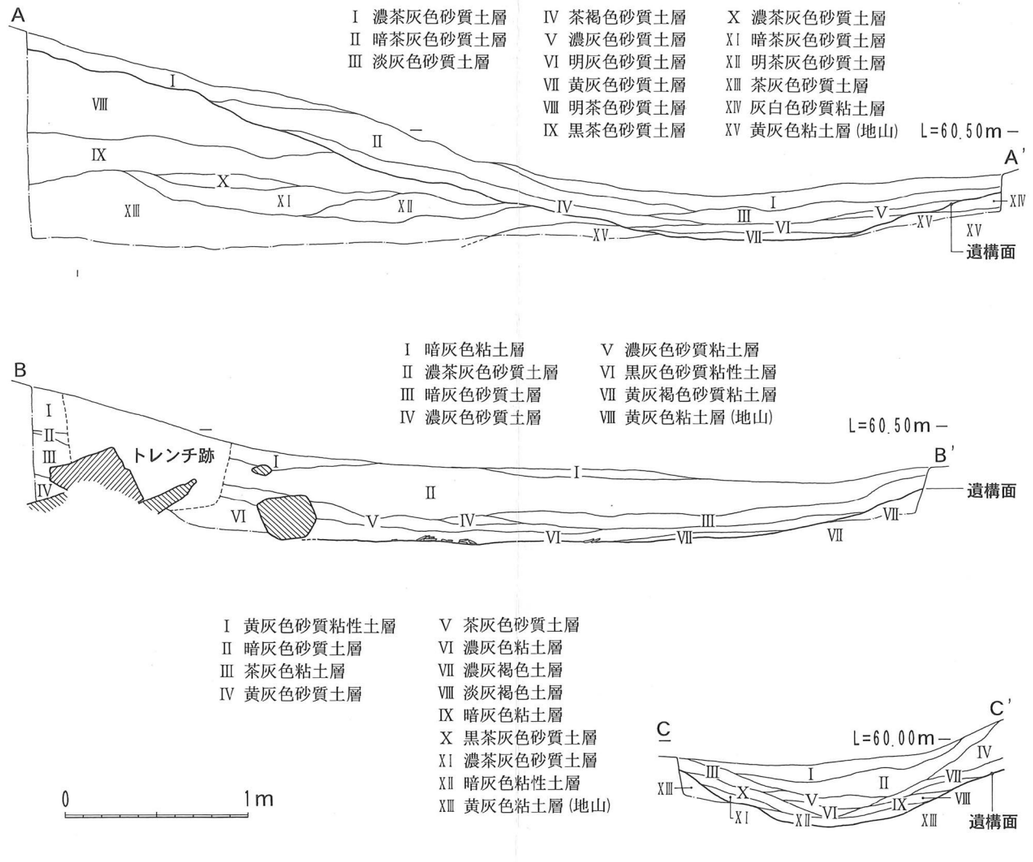
墓道とみられる前庭部の通路は約４ｍの長さを経て古墳の周溝に沿って東に曲がり、このまま周溝上を通るようで、東側の周溝は前庭部平坦面より高い位置にあり極めて浅いのに対して、西側は前庭部の平坦部から連続して深く緩やかに下っている。しかし墓道が周溝から分岐する箇所は確認できておらず、前庭部からの排水を考慮しての構造の可能性も考えておくべきであろう。

第40図　前庭部調査区検出状況①（北から）

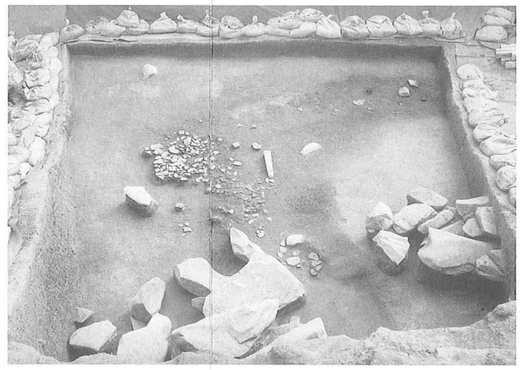
また、前庭部西側の墳丘上には30～50cm程の石材が集められている。羨道部から運



第41図　宮が尾古墳前庭部調査区検出状況実測図



第42図　宮が尾古墳前庭部土層堆積状況実測図

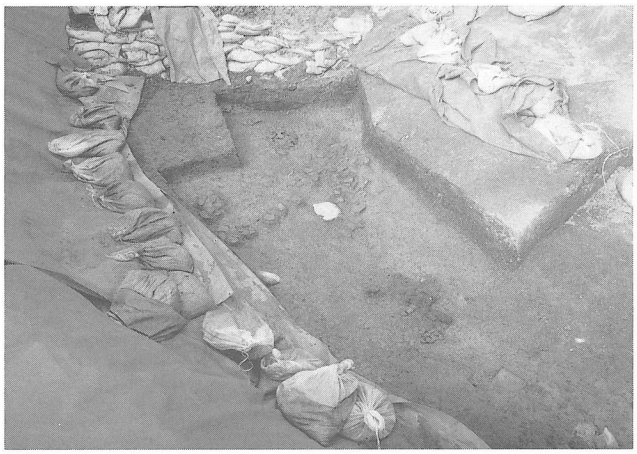


第43図　前庭部調査区検出状況②（南から）

び出された閉塞石と思われる。

また、墓道上に炭化物の堆積が著しく、しかも遺物の堆積が確認されたため、この周溝上に調査区を拡張したところ、炭化物の堆積物と共に多量の須恵器が出土した。

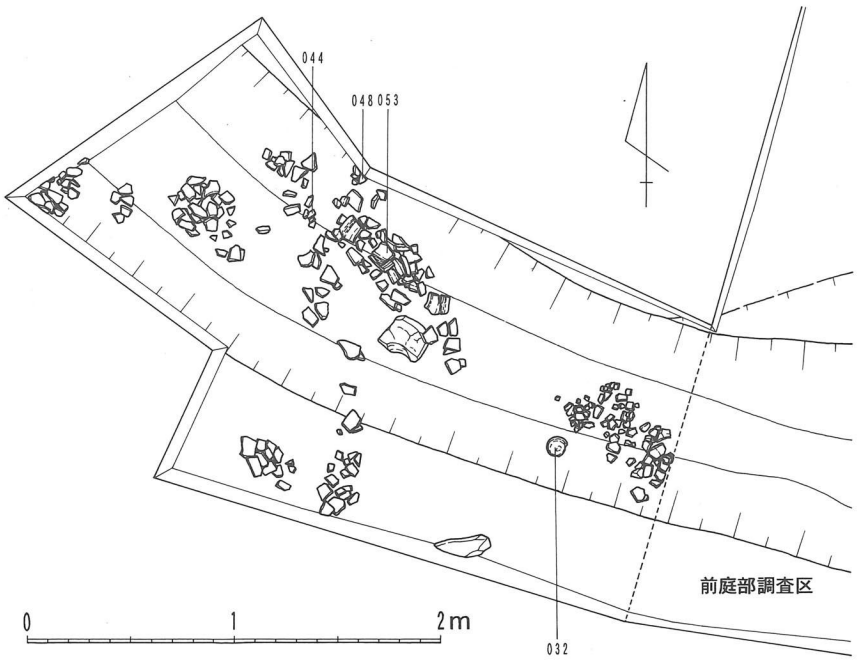
出土した土器は大甕や高坏、坏、瑕などで、全て粉砕状態で散乱していた。前庭部の須恵器群や玉類を含めて、石室内部から運び出された副葬品が大半ではないかと考えられるが、追葬の際に掻き出されたものか、後世に荒らされたものかを明らかにすることはできていない。



第44図　前庭部拡張調査区検出状況

ただ埋没状態から考えればかなり古い時期のことであり、前庭部の遺物は大半が7世紀前半の所産であるが、一部8～9世紀前後の土器片も含まれていることから、その時期の行為の可能性が高いようである。

また、平成6年度の発掘調査の際に第5トレンチで確認された炭化物や須恵器片はこのすぐ近くであり、これらの遺物と同様のグループであると考えられる。(26頁参照)

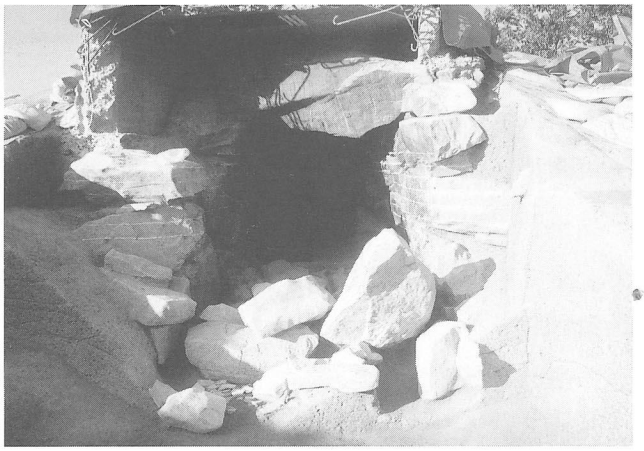


第45図　前庭部拡張調査区検出状況実測図

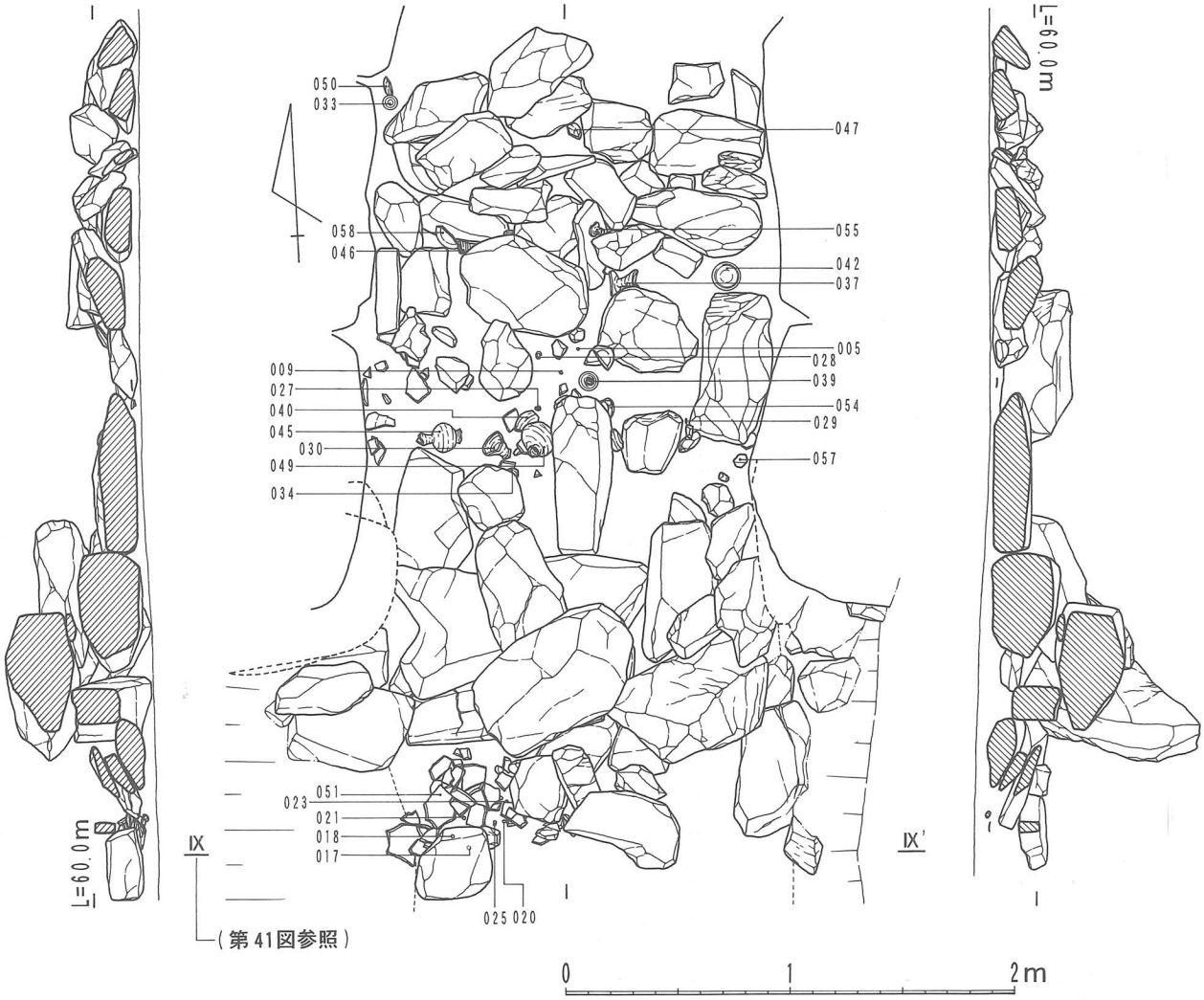
前庭部の調査を終えると直ちに開口部から羨道部にかけての発掘調査を開始した。

羨道部は昭和41年の発見当時の調査では全体が発掘されていないため、未調査部分の確認作業を行った。

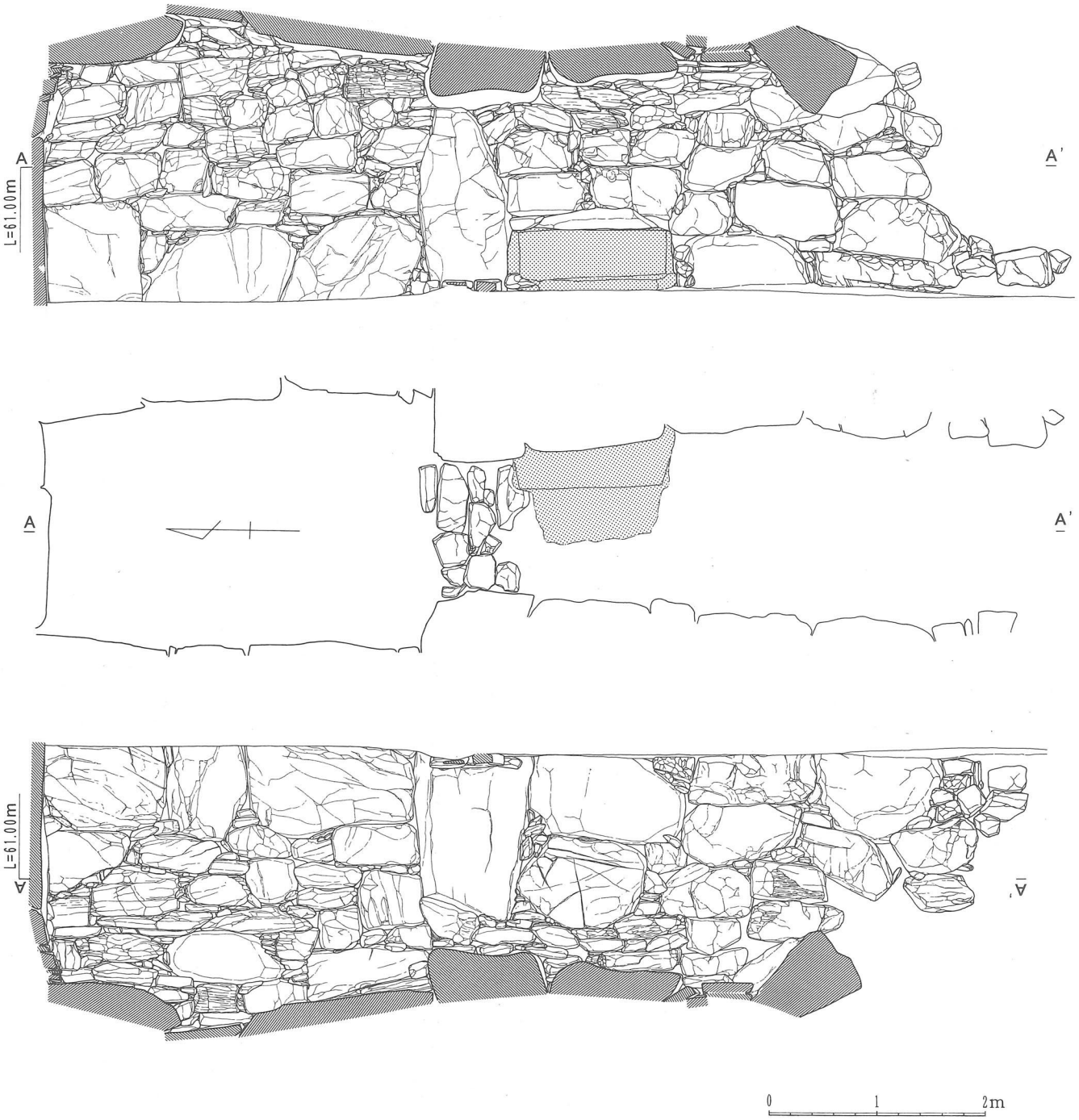
これまで石室内への進入に利用していた鉄製梯子と基礎を除去し彫削を開始したところ、開口部付近では両壁面から崩落したとみられる比較的大きな石材が折り重なるように堆積していた。この石材群からやや距離を置いて別な石材群が確認できたが、位置は開口部から２～３ｍ入った場所であ



第46図　開口部の石材崩落状況



第47図　羨道部床面検出状況実測図



第48図（上）　羨道部完掘後の横穴式石室実測図

第49図（左）　羨道部床面検出状況（南から）

り、この辺りの壁面は壊れていない、また石材は小振りで大きさの揃った物が整然と並んでいたことから、閉塞石の残りではないかとみられる。

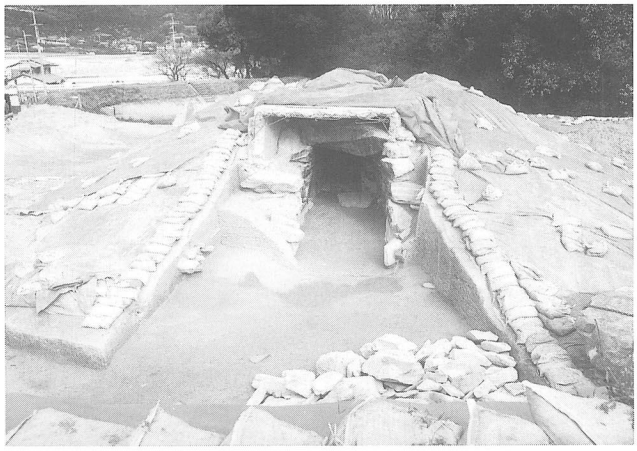
また、両石材群の間と閉塞石周辺には多数の須恵器の他、ガラス玉や耳環が遺存していた。前庭部の土器は全て粉砕状態であったが、羨道内部に残されていた土器は大半が原形を留めており、７世紀前半代の土器に混ざり９世紀代の土器も確認できた。

これらの遺物の出土状況等から、７世紀前半代に古墳への埋葬は終了したものの、８～９世紀代に、何者かが再び閉塞石を外し石室に侵入している。侵入者の目的は不明であるが、副葬品を前庭部に運び出し一部を燃やした。そして暫くして開口部から崩壊し天井石が落ち埋没し、今に至ったものとみられる。県下では多数の後期古墳で同様の事例が確認されており、古代末から中世頃に共通した何らかの行為があったことが考えられる。

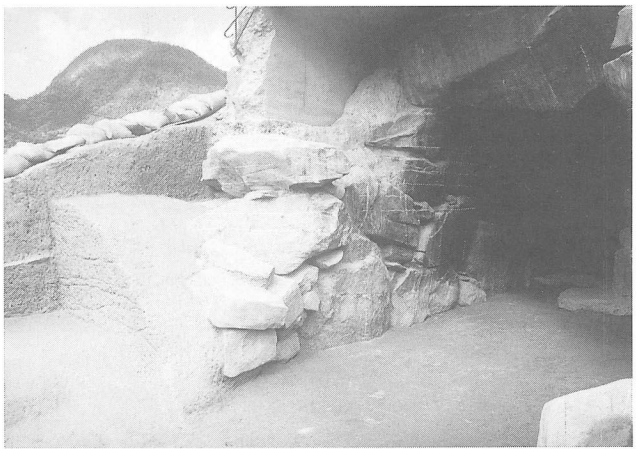
さて羨道の構造であるが、基底部には玄門立柱からそれぞれ３点の巨大な石材が地山を掘り込み対称に設置されている。更にその上に積まれた石材も大きなもので、非常に安定している。また天井石も３点あり、それぞれ基底部の巨大な石材の真上に来るように架設されていたようで、開口部の端は最初は垂直に近い構造であったらしい。

その外側には垂直な壁を押さえるように小型の石材が斜めに積み上げられていたようであるが、その基底部は石材がやはり小型で、しかも不安定な盛土上に置かれた状態であったため、基底部の石材は全て内側に傾き膨らみ出ていた。つまりこの部分の石積みは開口部を整形するだけの目的で置かれたものであり、強度は考えていなかったようである。従って、地震などによる石室の主軸方向の揺れによって容易に天井石が崩落したと考えられる。

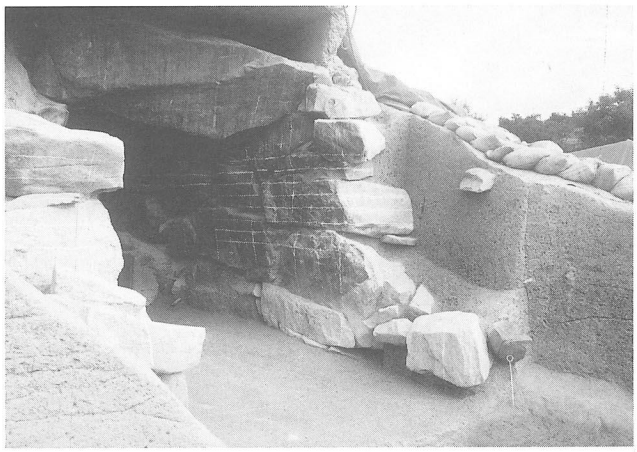
さて、問題は復元方法である。構築当時の状態に復元すれば、やはり同様の理由で崩れる可能性が高く、この復元工法については整備工事実施時の課題となった。



第50図　完掘後の開口部（全景）



第51図　完掘後の開口部（西壁）



第52図　完掘後の開口部（東壁）

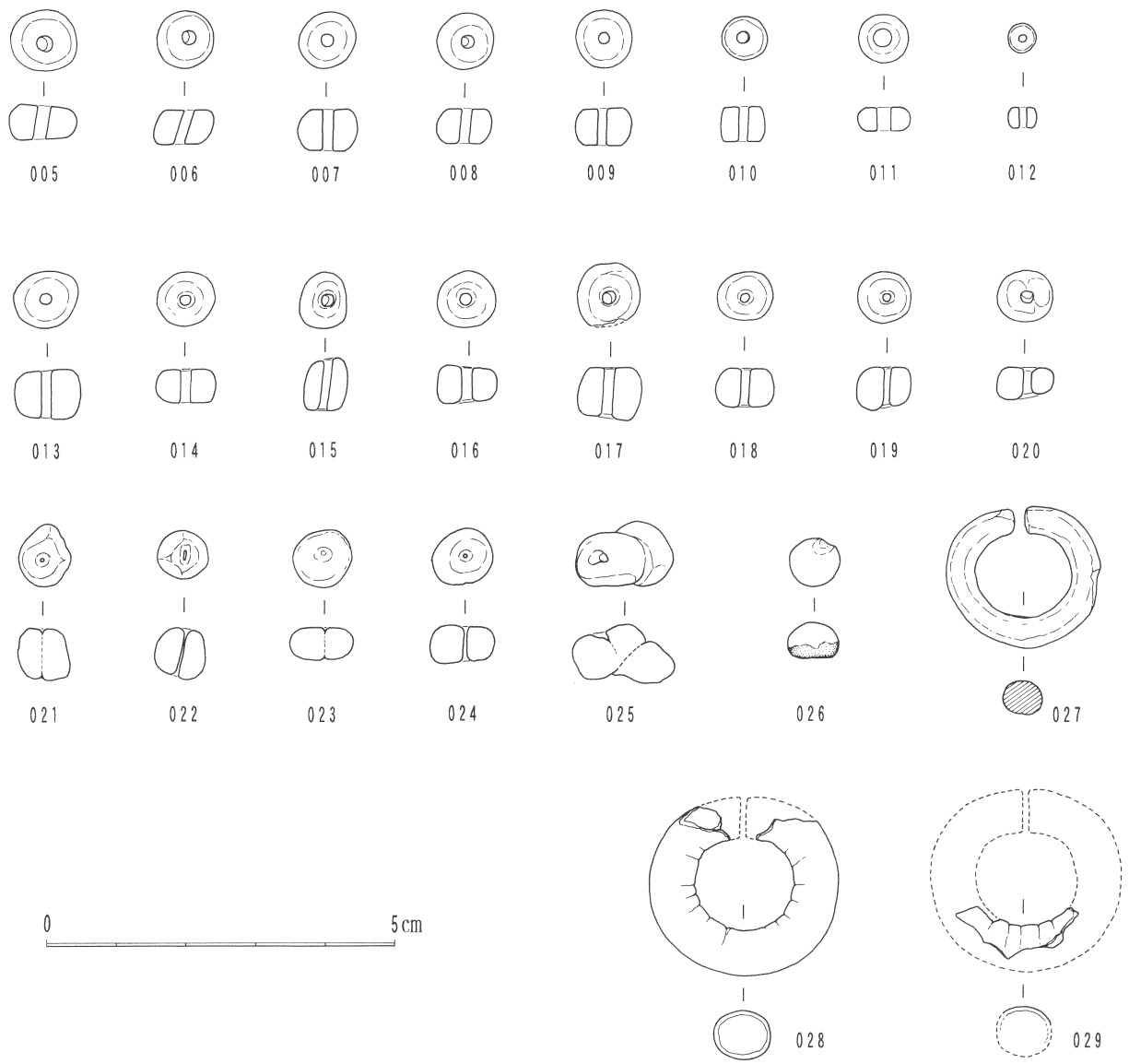
③出土遺物

遺物の出土位置は主なものについては35頁～38頁の実測図中に記したが、後世の人為的な移動により、副葬された原位置を留めているものは少ないようである。ただ、開口部・前庭部・周溝（墓道）からそれぞれ一点ずつ出土した大甕（051・052・053）は、粉砕されていたにも関わらず破片が集中して遺存していたため、ほぼ原位置を示しているように思われる。

副葬品とみられる須恵器（030～053）、土師器（054・055）は７世紀前半代のものである。056のみ８世紀代の所産とみられ、副葬品ではないようである。057の坏（土師器）と058の皿（須恵器）は９世紀代の所産であり、羨道の閉塞石周辺から副葬品と共に出土しており、石室内部の遺物が人為的に室外に運び出された時期を示した資料ではないかとみられる。

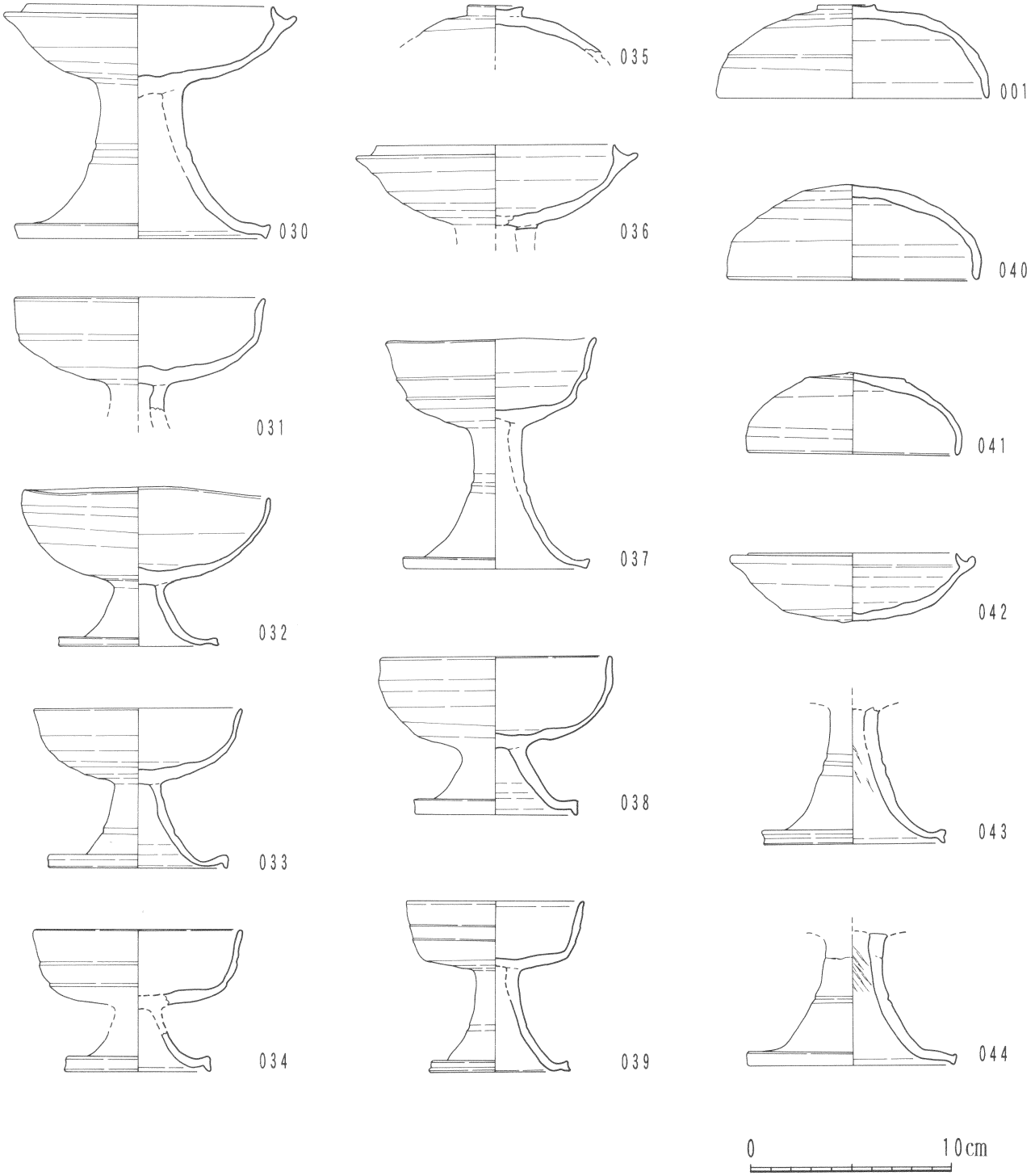
最初に装飾品を掲載した005～025はガラス玉で、014～025は高温で焼かれており表面は荒れてやや変形している。このうち021～025は大きく変形し、025は２点の玉が癒着している。

026は別な素材に貼り付けていた装飾ガラスである。材質は他のガラス玉と同様である。馬

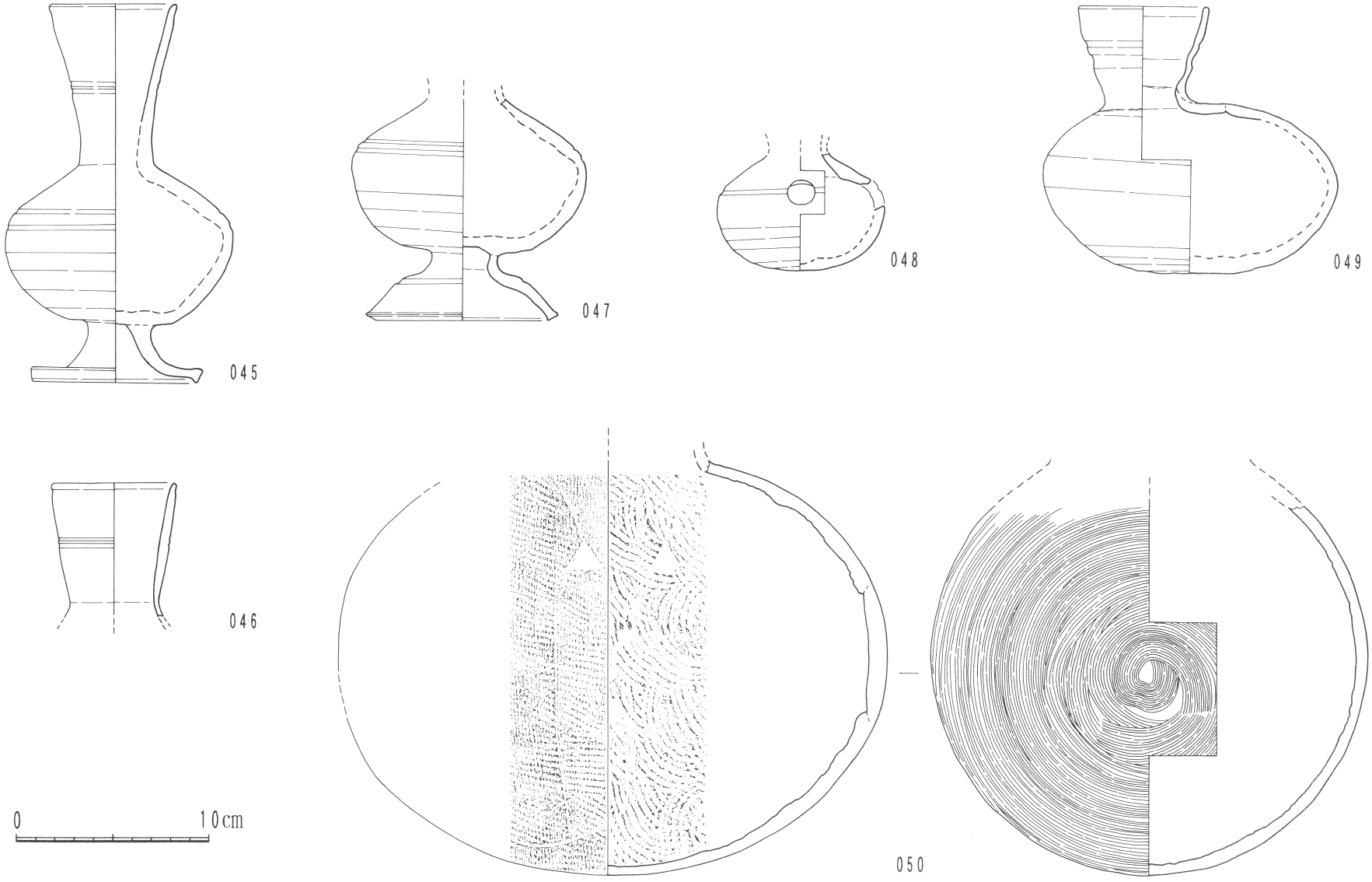


第53図　出土装飾品実測図

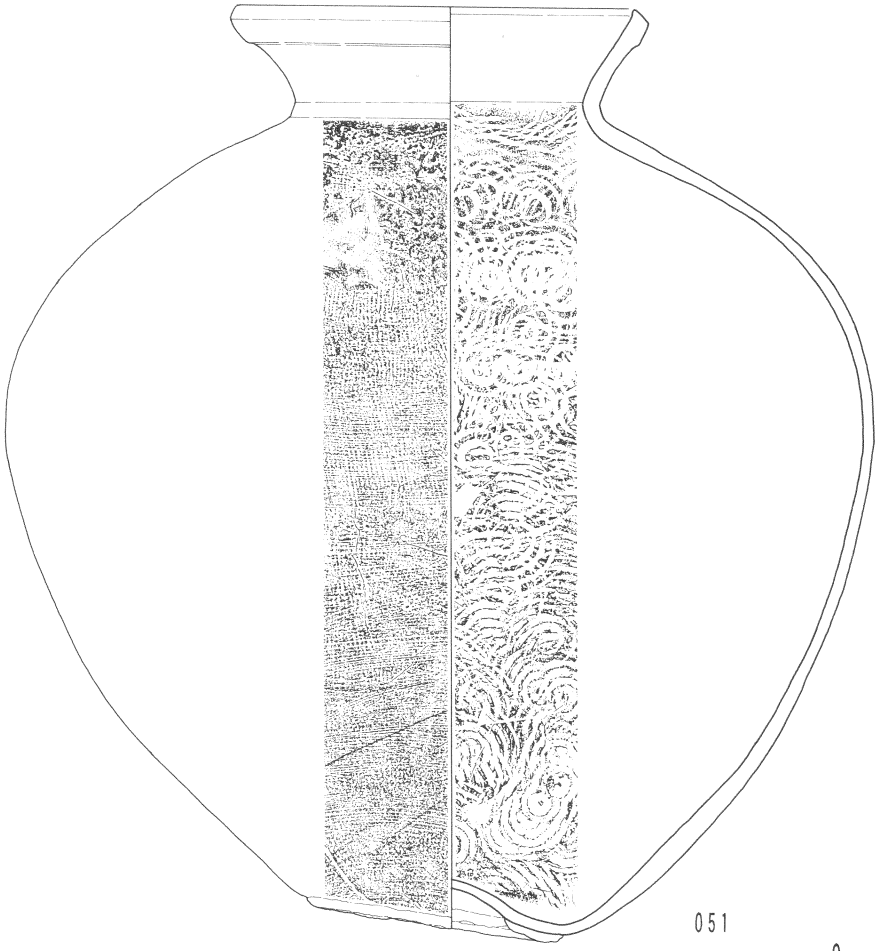
具や武具は出土しておらず、いかなる工芸品を飾っていたものかは不明ではあるが、特筆できる遺物である。027～029は耳環で、027は銅線を曲げて銀箔を貼ったもの、028・029は中空で銅に銀箔を貼ったものである。029は銀が酸化せず美しい光沢が残る。装飾品の写真は46頁に掲載した。

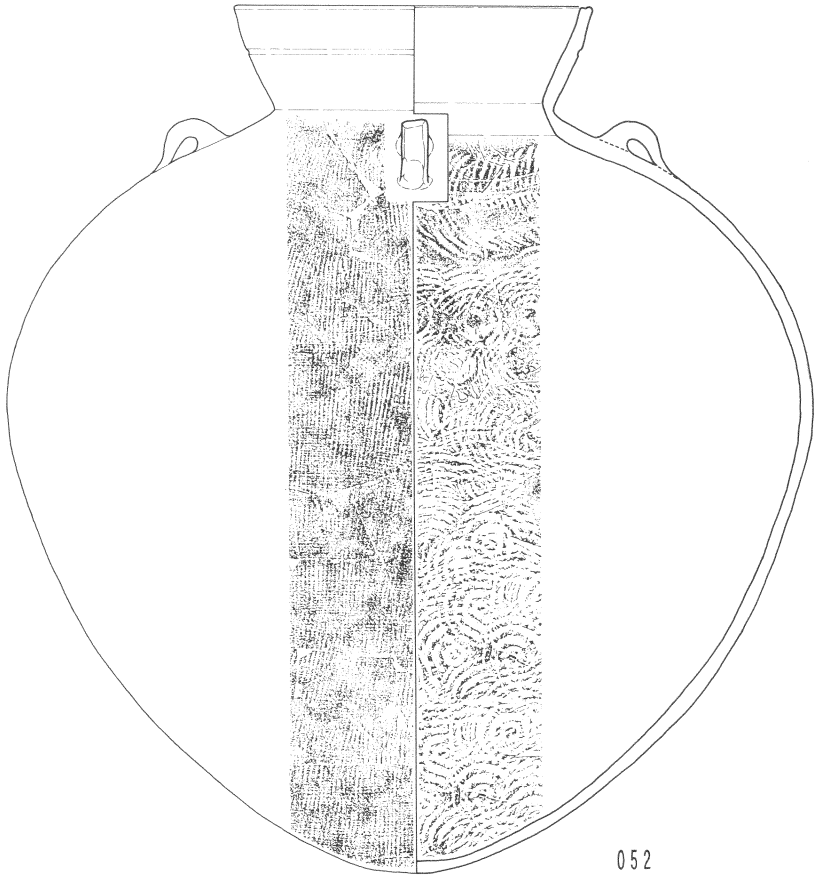


第54図　出土土器（須恵器）実測図①



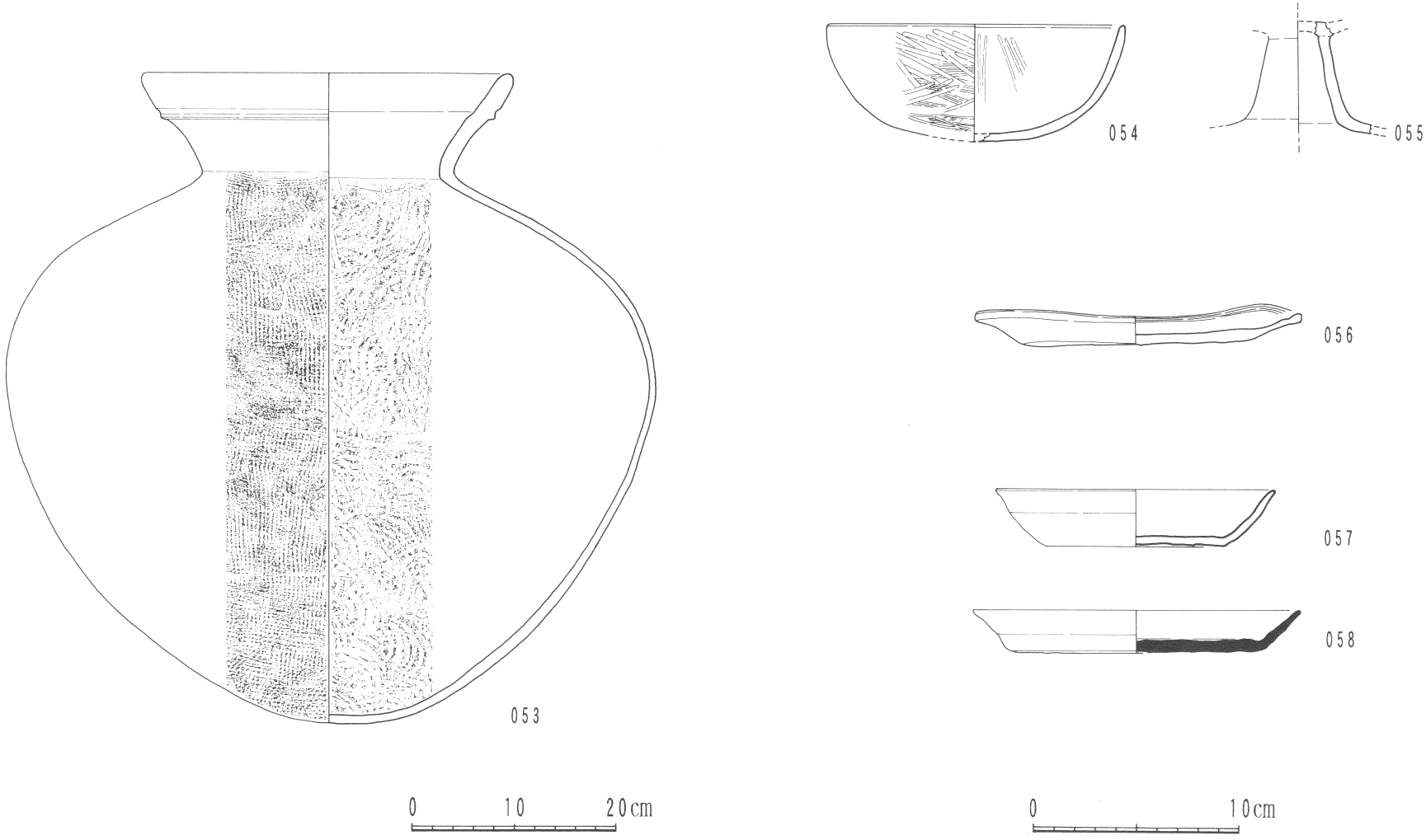
第55図　出土土器（須恵器）実測図②



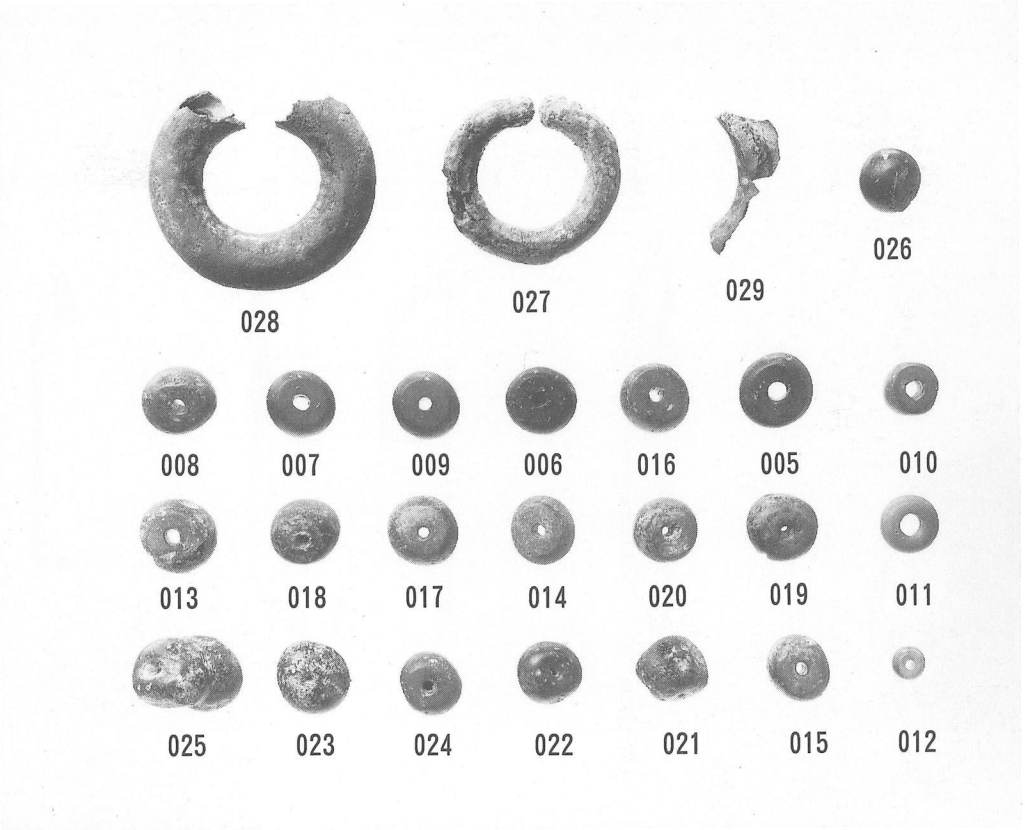


0　10　20cm

第56図　出土土器（須恵器）実測図③



第57図　出土土器（須恵器・土師器）実測図④

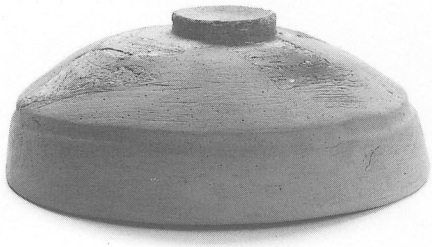


第58図　出土装飾品写真

第59図　出土土器①（須恵器）

034

038



035

039

036

001

037

040

第60図　出土土器②（須恵器）

041

042

043

044

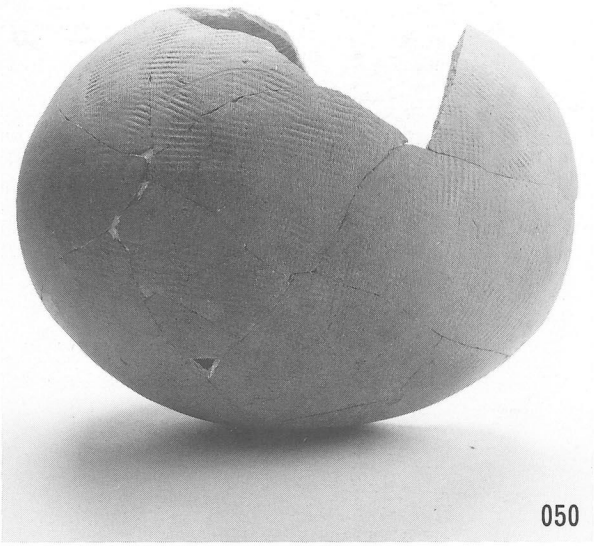
045

046

047

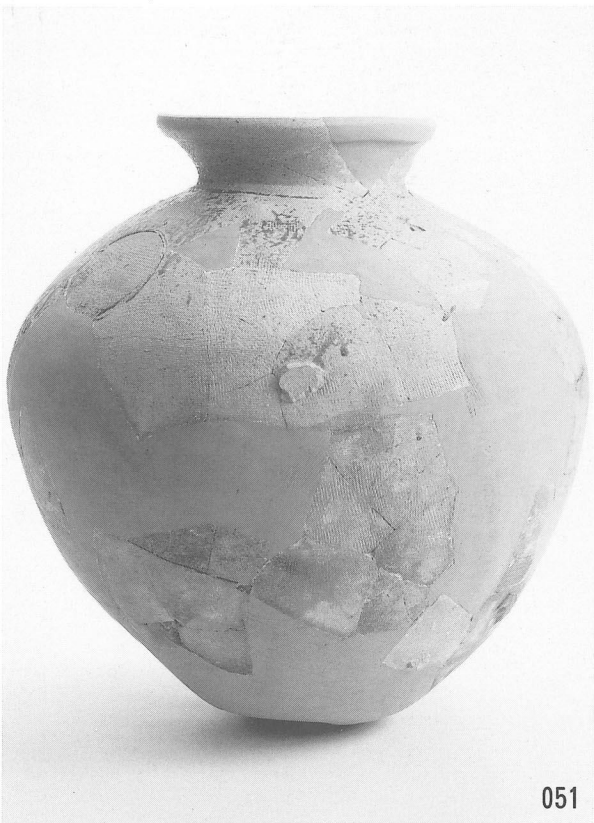
第61図　出土土器③（須恵器）

048

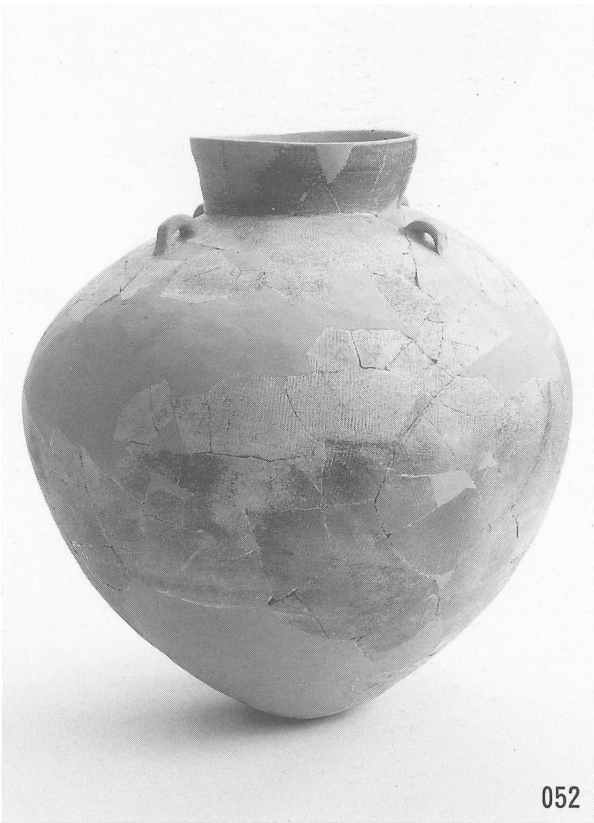


050

049



051



052

第62図　出土土器④（須恵器）

053

056

～8世紀代～

054

057

055

058

～9世紀代～

第63図　出土土器⑤（須恵器・土師器）

④墳丘の発掘調査

羨道部東側壁面の玄門に接する最下段の石材は石室内部に大きく傾き、その上部壁面も変形し内部に大きく膨らみ出していた。

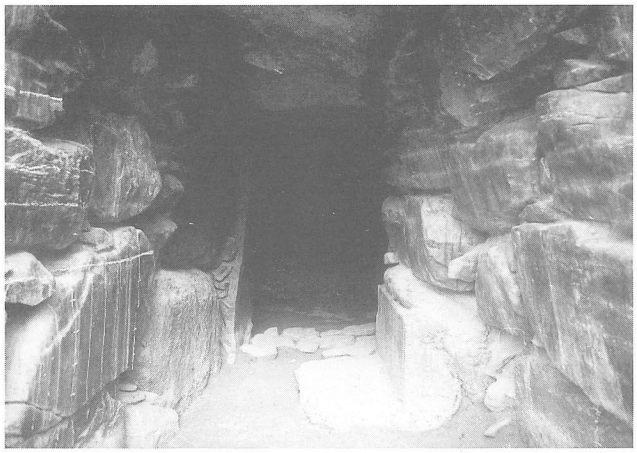
壁面は変形した状態で落ち着いてはいたが、発見直後にＬ字形の鉄骨とコンクリートで補強されていた。

この部位の解体修理実施は調査整備委員会で決定しており、工事の際には墳丘の一部が破壊されることになる。そこで、開口部の調査や実測作業と並行して、破壊が予想される範囲に墳丘調査区を設定して発掘調査を計画した。(34頁第39図参照)

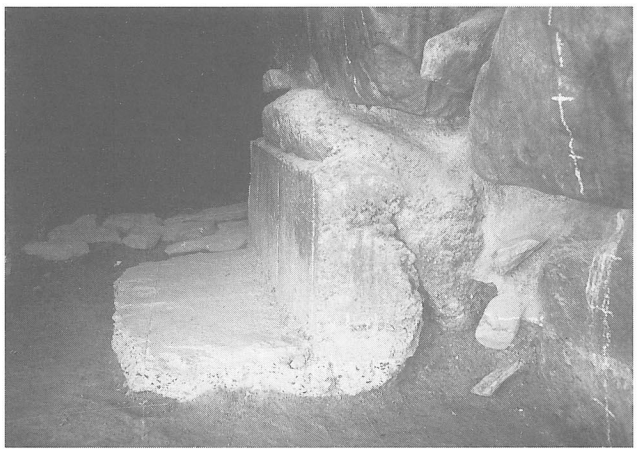
しかしながら、一部分の調査では墳丘の構造や構築状況を知る資料を得るには乏しく、掘削予定範囲の幅で調査部分を墳裾部まで延長し、墳丘片側断面全体を確認することとした。

掘削を開始したところ２ヶ所で石列が確認された。最初の石列は石室を構成する石材群から１ｍ程離れた場所、現存する墳丘面から約１ｍの位置で、石室の主軸方位と平行して検出された。石材は50㎝前後の大きさで比較的大きいが、並ぶ感覚は一定していない。調査区北側壁面で墳丘の版築土層と比較すると、盛土の際の土留めが目的であったと考えられる。

次の石列は石室を構成する石材群から3.5ｍ程離れた場所、現存する墳丘面直下で、やはり石室の主軸方位と平行して検出された。こちらの石列も盛土の際の土留めが目的であったようである。



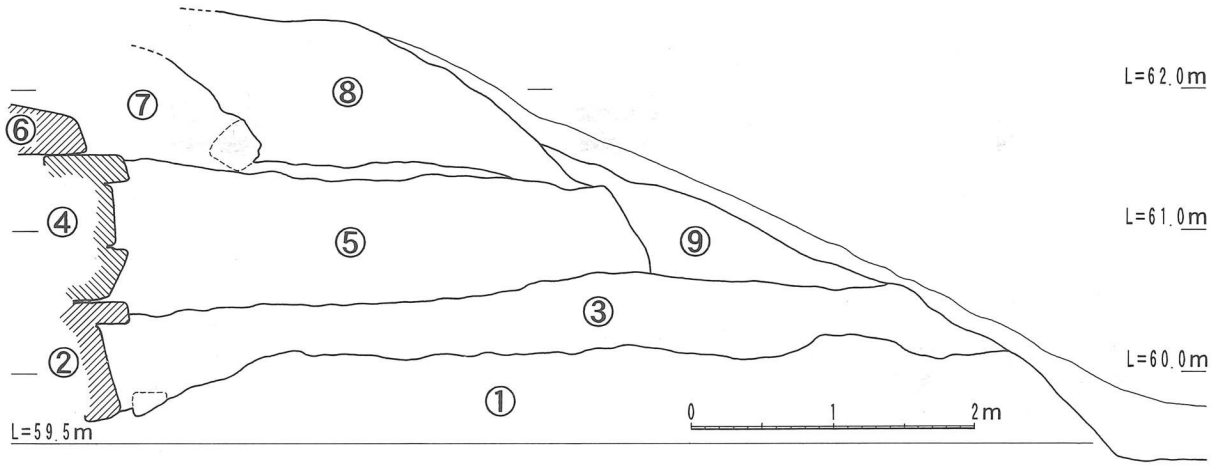
第64図　羨道の変形部分（右壁）



第65図　羨道東壁の変形箇所と補強の状態

第66図　墳丘調査区での発掘作業風景

石列の状態を記録した後、石材を除去し更に掘削を続けたところ、強固に版築された土層の下から地山とみられる黄茶灰色砂質粘土層(第Ⅺ層)が表れた。現存する墳頂部から約2.5ｍの位置である。これより20～30㎝程下でほぼ水平に堆積した黒茶褐色砂礫層が確認されたが、これは風化岩盤表面の変色部分であり、この上の土砂は自然堆積とみられることから、やはり第Ⅺ層をこの古墳が構築された時期の地山とした。

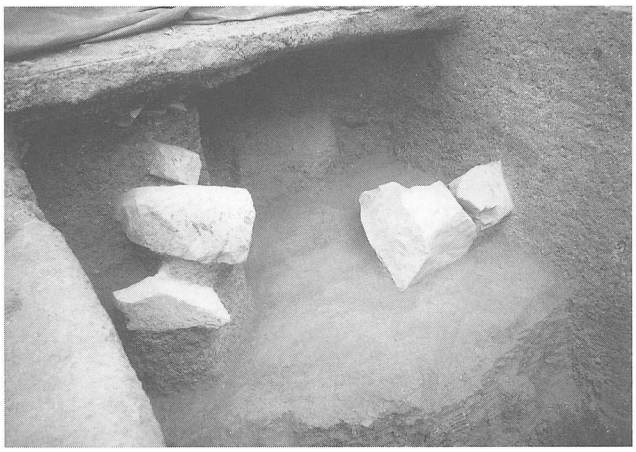


第67図　墳丘の構築過程

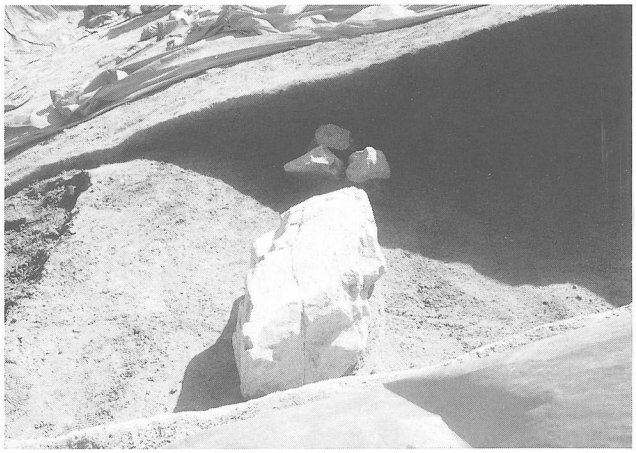
この古墳の墳丘は、①地山を整形し周溝部を明確にし、石室構築部分を決定しやや掘り下げた場所に②石室基底部の石材を並べ、③この高さまで盛土を行っている。④続けて中段から上段の石材を積みながら、⑤壁面上部まで盛土を行い、⑥天井石を架設している。次に⑦天井石を覆うだけの盛土を行っているが、急傾斜となる盛土の縁辺部に石列を回り土留を行い処理している。更に⑧これを覆うように盛土を行っているが、この場合も急傾斜となる盛土の縁辺部に石列を廻し土留を行い処理している。

この状態では二段構造のような形状を呈しているが、墳丘中段を廻る平坦部は墳丘上部の整形作業の際の足場とみられ、⑧までの作業後、⑨盛土によって覆われ、最後の整形で墳丘が完成しているようである。

この構築状況は羨道部の様子であり、玄室部分は天井部が羨道の天井石一枚分高くなっていることから⑦の工程が更に複雑になっていると予想されるが、墳丘の掘削は必要範囲に留め、これ以上の調査は行っていない。



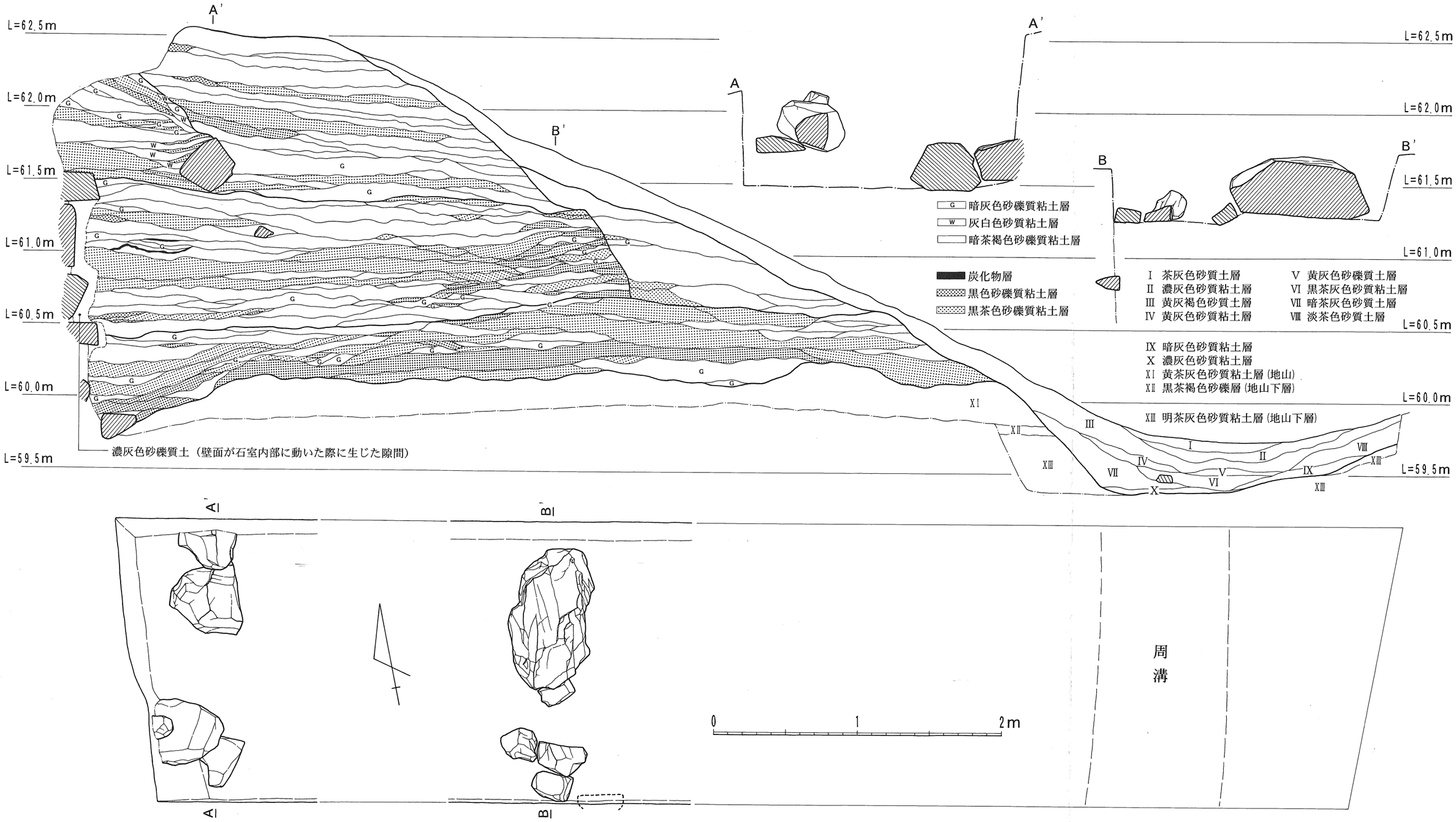
第68図　墳丘内部の石列（A～A′）



第69図　墳丘内部の石列（B～B′）

⑤線刻画のある石材の出土

また、⑤の縁辺部も急傾斜であるが、この場所は盛土の後に削られて生じたものであることが土層断面の観察で判る。調査区の南側壁面の実測は行っていないが、⑤の縁辺部下層部分に小型の石材が露出してい



第70図　墳丘土層及び土留石材検出状況実測図

第71図　墳丘調査区北側壁面土層（墳丘部）

第72図　墳丘調査区北側壁面土層（周溝部）

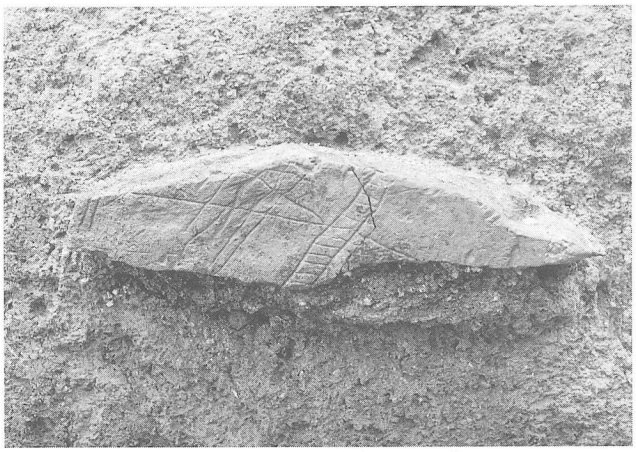
たが、この表面には人為的に施された線刻画が確認できた。モチーフは連続して平行に描かれた線や梯子状の図形であった。→

この石材を取り上げた後に、調査区北側壁面の土層の実測作業に取り掛かったが、この作業中に、別な石材にも線刻画があることが判明した。それは、最初に確認された石列のうち、調査区北側壁面に残されていた石材の下の面であり、やはり梯子状の図形が確認できた。(第74図)

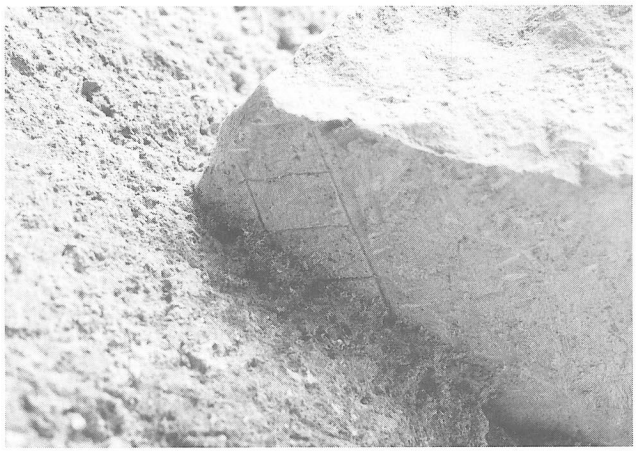
調査区北側壁面土層の実測作業完了後、この石材を取り出したが、そこには宮が尾古墳奥壁の人物群と共に描かれている小さな家のような構造物の両側に梯子状の図形が描かれていた。その他に多数の矢を収納した靫、別に矢のような表現も見える。線刻画が描かれた石材が墳丘内部から発見された例は無く、その目的について地鎮の祭祀など様々な憶測をしたが、この石材と最初に南側壁面で発見された石材が接合されたことで、構築以前に既に石室に使用する石材の線刻は完了しており、これが構築中に破損したため壁面への使用を断念し、墳丘内部に土留のための石材として埋めたものであると結論付けた。**(注1)**

この2点の石材の接合状況や破損の状態を見ると、当初はかなり大きな石材であったことが判る。他の部分についても墳丘内部に埋められていると考えられるが、保存状態の良い墳丘全体を破壊することになるため、調査区以外で線刻石材を探す作業は断念した。

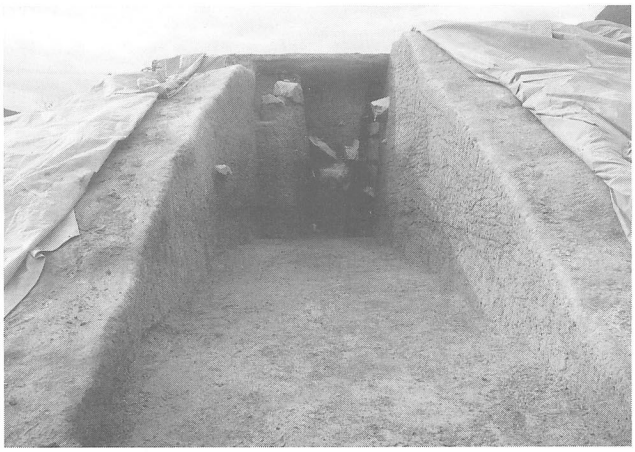
羨道のこの場所の変形が起こっていなければ調査はされず、今回の墳丘調査区の位置が多少でもずれていたらこの発見はなく、また一方の石材だけの発見ではこの結論に辿り着けなかったことであろう。幾つもの偶然が重なった誠に幸運な発見である。



第73図　墳丘調査区南側壁面の線刻石材



第74図　墳丘調査区北側壁面の線刻石材



第75図　墳丘調査区の完掘状況

右(南)側壁面中央の石材と左(北)側壁面奥上方の石材に線刻画が確認できた。除去した他の石材も全て調べたが、線刻画を有するもの、これらの石材と接合できるものは確認されていない。

墳丘は永久に保存されるので、その内部に残された石材は失われることはない。近い未来、地底探査等の技術が更に発達し、墳丘中の石材の位置が容易に特定できるようになり、局部的な掘削で残る線刻石材が取り出されることを期待したい。

この後、新たに発見された宮が尾２号墳の調査に着手したが、平成７年度に調査区を拡張し検出した羨道壁面でも線刻画が描かれた石材が確認された。そして驚くべきことに、その石材は宮が尾古墳墳丘内部から出土した石材と接合された。

詳細は続けて紹介する。石材接合状況の写真はカラーグラビア⑥に、実測図は82頁に掲載した。

（注１）石材の破損面は風化が著しく、線刻画が描かれた時には既に見えない亀裂が内部に生じてしていたようであり、小さな衝撃で容易に破損したとみられる。ここでは古墳構築前に線刻画が描かれていることが判明した。また、市内の夫婦岩１号墳でも天井石一面に描かれた線刻画の一部が壁面石材と接した部分にまで及んでいることから、天井石を架設する前に線刻画を描いていたことが明らかである。しかしながら、全ての線刻画が構築前に描かれていた訳ではない。実際には構築中（石材を設置してから）、または構築後に描かれたものが大半であろう。これを機に構築前の装飾例について関係機関にアンケート調査を実施したところ、45件中33件の回答があり、鳥取県八頭郡郡家町の米岡２号墳でも「右側壁の隙間に綾杉文の線が一部続いている」ことがわかったが、全国的にみてもこのような例は極めて少ない。アンケートでは古墳数全体数や装飾古墳の数、線刻と彩色の違い等についても尋ねたが、未回答もあり完全に整理できていない。また県下では装飾古墳の確認が続いており、市内に多く残る他の装飾古墳についても再度詳細を調査し、改めて発表の機会を持ちたいと思う。

第76図　宮が尾古墳墳丘調査区北側壁面から取り出された石材の線刻画

(2) 宮が尾２号墳

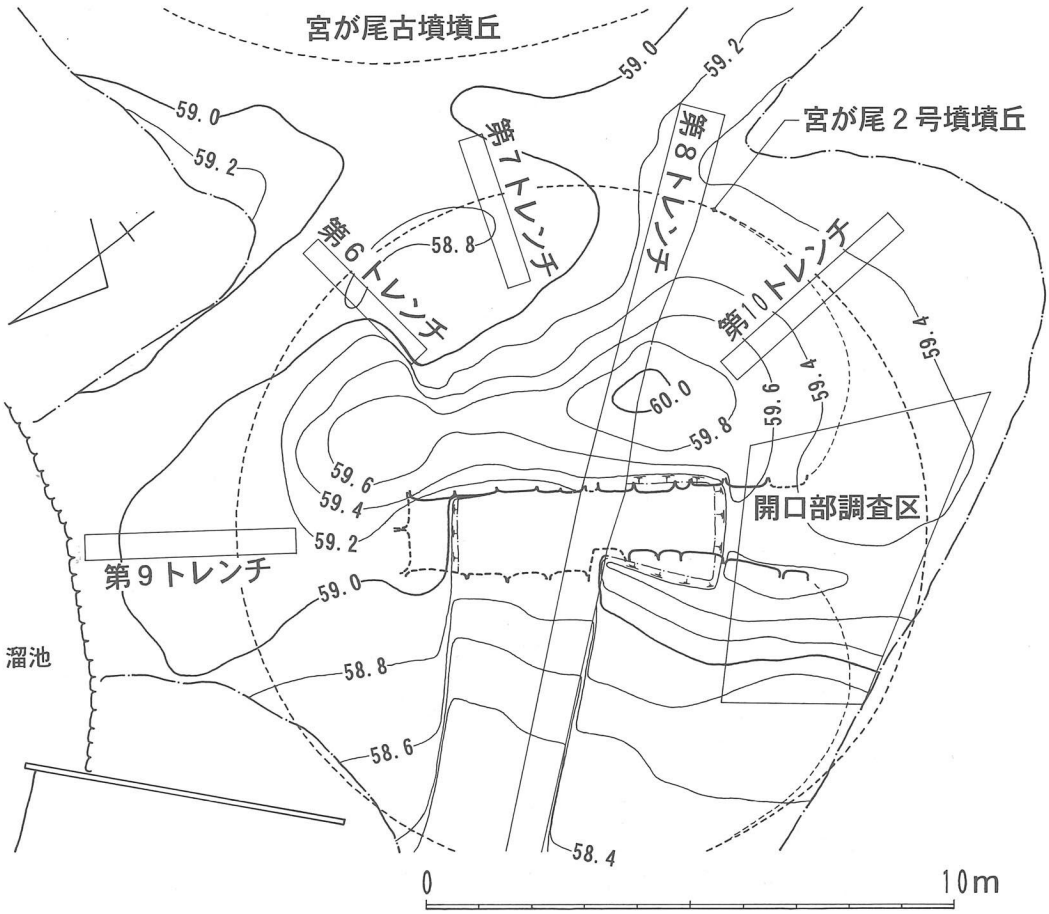
①未調査部分の発掘調査

平成６年度は偶然発見した玄室の中央部と墳丘の一部を調査しただけである。残る羨道部と開口部及び墳丘の未調査部分は平成７年度に継続して発掘調査を実施し、墳丘と石室全体を検出したが、その殆どは破壊されていた。

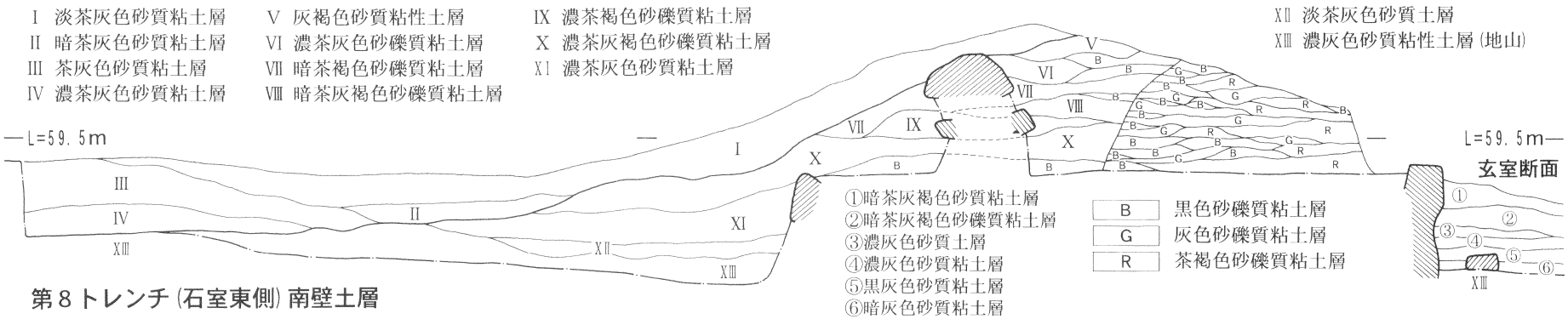
第77図　発見当時の２号墳玄室検出状況（Ｈ６）

この２号墳は史跡指定地内に位置しており、宮が尾古墳と併せて保存整備されることになるため、墳丘の規模などを正しく把握する必要があった。そこで、平成６年度の調査の際に設定した３箇所のトレンチに加えて、墳裾部と思われる箇所に小トレンチを新たに２箇所設定した。

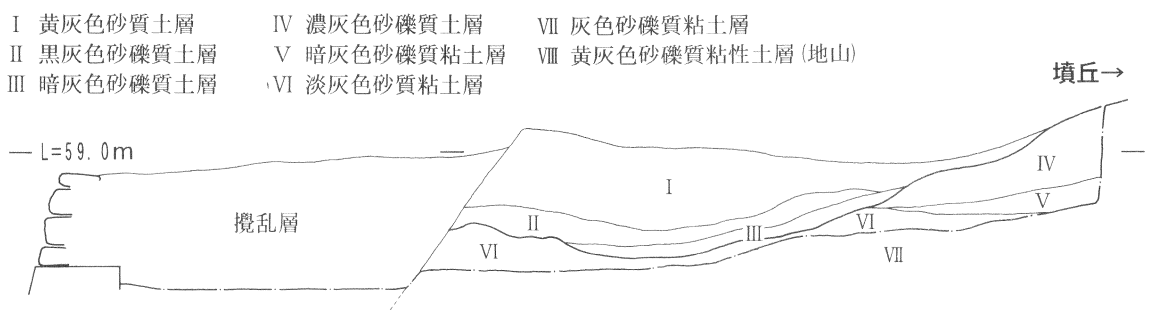
結果を見ると、西側墳丘は玄室西側壁面と共に完全に失われていたものの、南側から東側にかけての基底部の遺存状態が比較的良好であり、幅１ｍ程の浅い周溝状の窪みが検出され、直



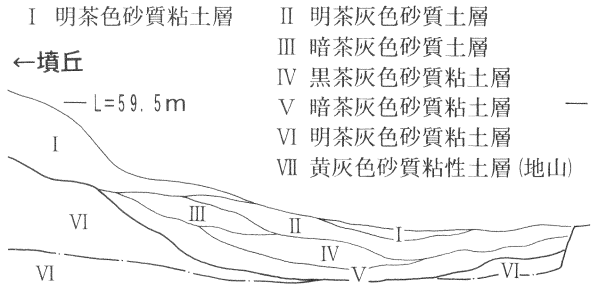
第78図　２号墳墳丘検出状況及びトレンチ配置図



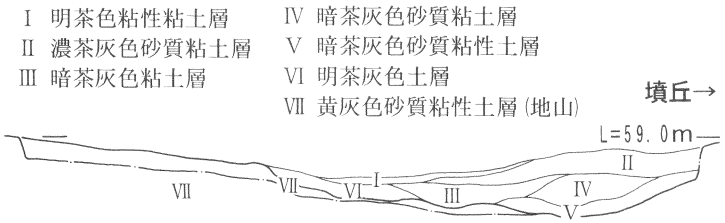
第８トレンチ（石室東側）南壁土層



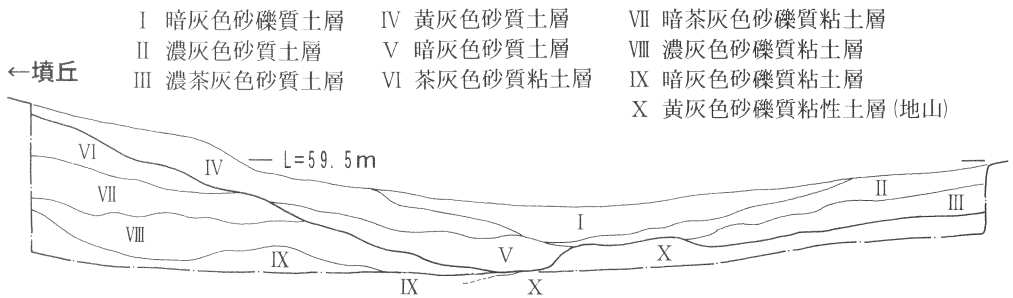
第９トレンチ東壁土層



第６トレンチ（東側）北壁土層



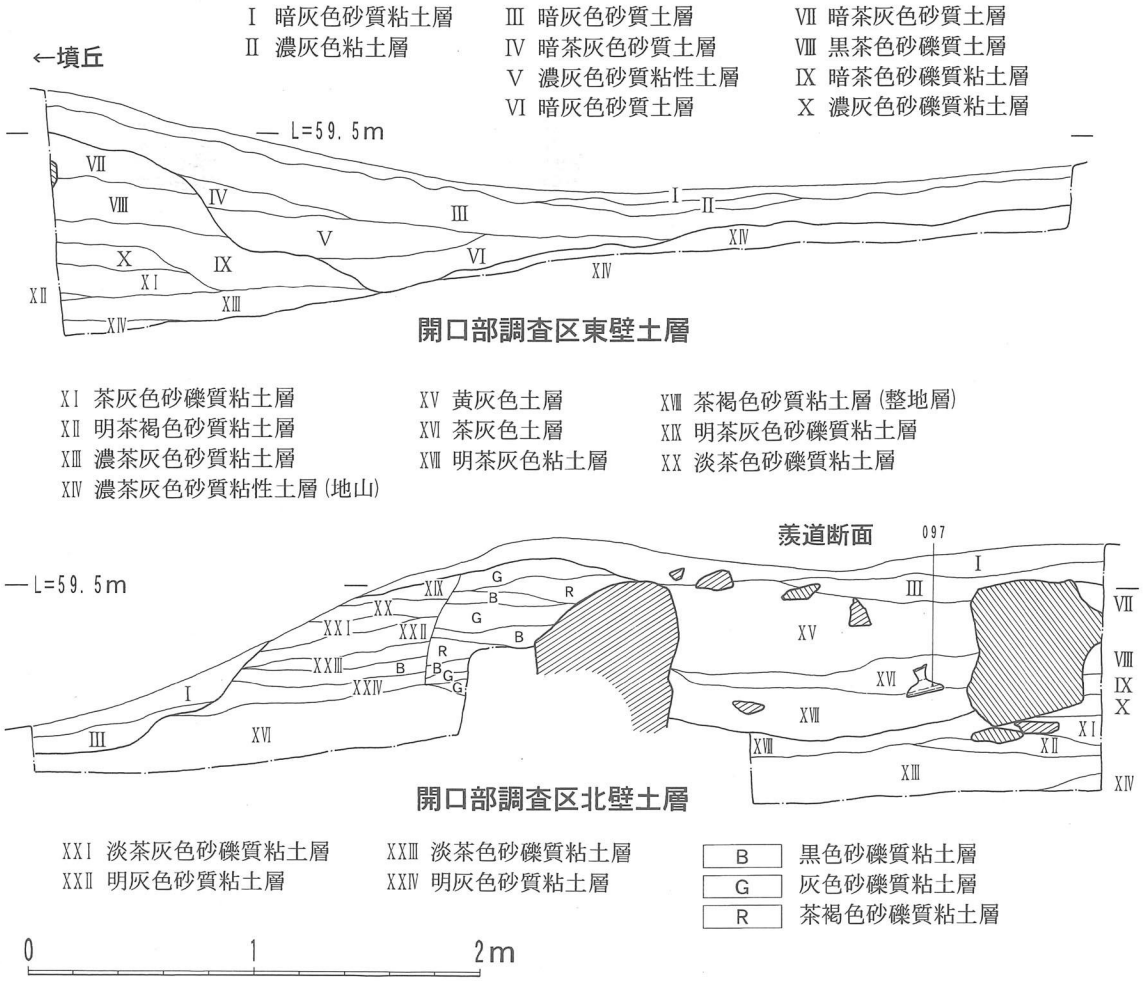
第７トレンチ南壁土層



第10トレンチ東壁土層

0　1　2m

第79図　２号墳墳丘トレンチ土層実測図

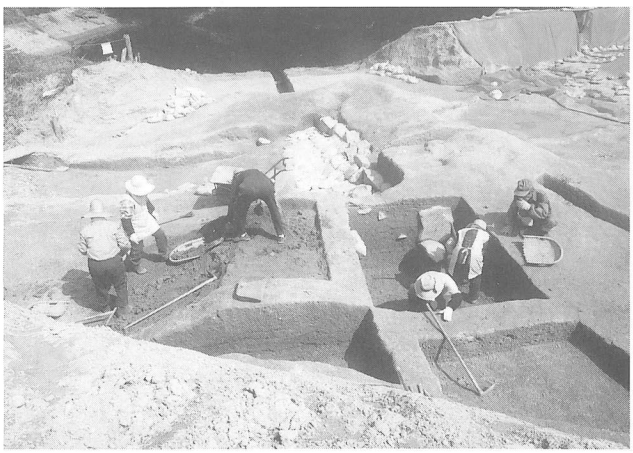


第80図　2号墳開口部調査区土層実測図

径13～14m程の円墳であることが判明した。この周溝の外辺は宮が尾古墳の周溝外辺と接するように造られており、両者が集団間でも血縁の濃い家族の墓であることが予想された。

墳丘の構造については断片的な資料ではあるが、第8トレンチ南壁と開口部調査区北壁で、宮が尾古墳と同様に石室の構築と並行して何段階かに区分して行われた盛土の構築状況が観察できた。しかしながら墳丘の高さなど立体的規模については不明である。

また、開口部にも調査区を設定したが、宮が尾古墳のような墓道状の遺構は確認できなかった。ただ、後世に人が手を加えたとみられる盛土が開口部西側に堤防状に延びており、この土砂中からは炭化物と共に12世紀前後の土器が多数出土した。同様に炭化物と土器を含む土砂の堆積は玄室内部にもあり、この時期に何者かが出入りしていたことは確認できたが、2号墳が破壊された原因や時期との関連は不明である。



第81図　2号墳開口部発掘調査風景

次に横穴式石室であるが墳丘と同様に遺

存状況は極めて悪い。石室の主軸方位は宮が尾古墳がほぼ北を向き南に開口しているのに対して、N－37°－E方位を向き南西に開口している。

ほぼ同じ時期に隣接して構築された古墳の規模や構造、主軸方位(開口方位)が異なる点が疑問視されるが、規模や構造の違いは同じ血族としても家族間の力の違い、また主軸方位(開口方位)が違う点については、両古墳共に北側が谷となり急傾斜であり、本来墓道があったと考えられる尾根筋が、宮が尾古墳では南側、2号墳では南西側にあったと推定されることから、地形（墓道）に左右されたものではないかと考えられる。

玄室東壁と羨道東壁、そして羨道西壁は最下段の石材を残して上部は全て失われていた。玄室西側は完全に失われていたが、玄室の西壁部や奥壁部では基底石の抜き取り跡とみられる窪みが検出され、平面規模は復元が可能である。石室は左片袖式で、玄室長は3.5m、玄室幅は奥壁部で1.2m、中央部で1.5m、玄門付近で1.3mと胴の膨らんだ形状を呈している。

羨道長は4.0m、玄門部で1.0m、開口部付近で1.4mを計る。

玄室内は地山上に20～40cm程の薄い板状の安山岩が敷かれ、更にこの上に3～10cm程の円礫(砂岩)が敷き詰められていた。この礫床上には副葬品と見られる7世紀前半代の遺物を多量に含む厚さ10cm前後の土砂があり、玄室内ではこの上に炭化物と12世紀前後の土器を含む土砂が堆積がしていた。

出土した後世の土器は生活雑器が多く、何者かがこの石室で暮らしていた可能性も考えられるが、侵入者は玄門部付近では礫床を剥り取り、この箇所に多数の副葬品を集積している。玄門部にあったと見られる仕切石も外側に動かされており、副葬品で最初に置かれた位置を留めているものは殆ど無いようである。

羨道部からも多数の副葬品が出土したが、ここでは遺物の上に40～60cm程の比較的大きな石

第82図　第8トレンチ南壁墳丘断面

第83図　2号墳羨道部遺物出土状況

第84図　2号墳検出状況（全景）北東から

材が転落した状態で堆積していた。

石材下の遺物は全て副葬品とみられる７世紀前半代の物であり、玄室や開口部のように後世の遺物は含まれておらず、12世紀頃までに羨道は一部破壊していたのではないかと考えられる。

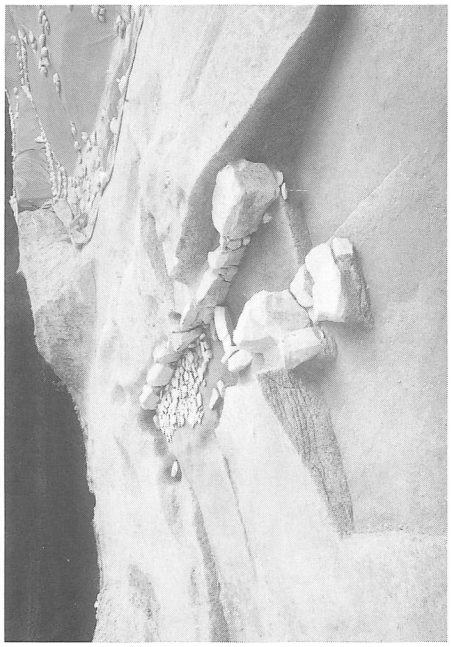
②出土遺物

主な遺物の出土位置については60頁と62～63頁の遺構実測図中に記したが、玄室内の遺物については後世、侵入者により動かされたものが大半で、本来副葬された位置は留めてはいない。

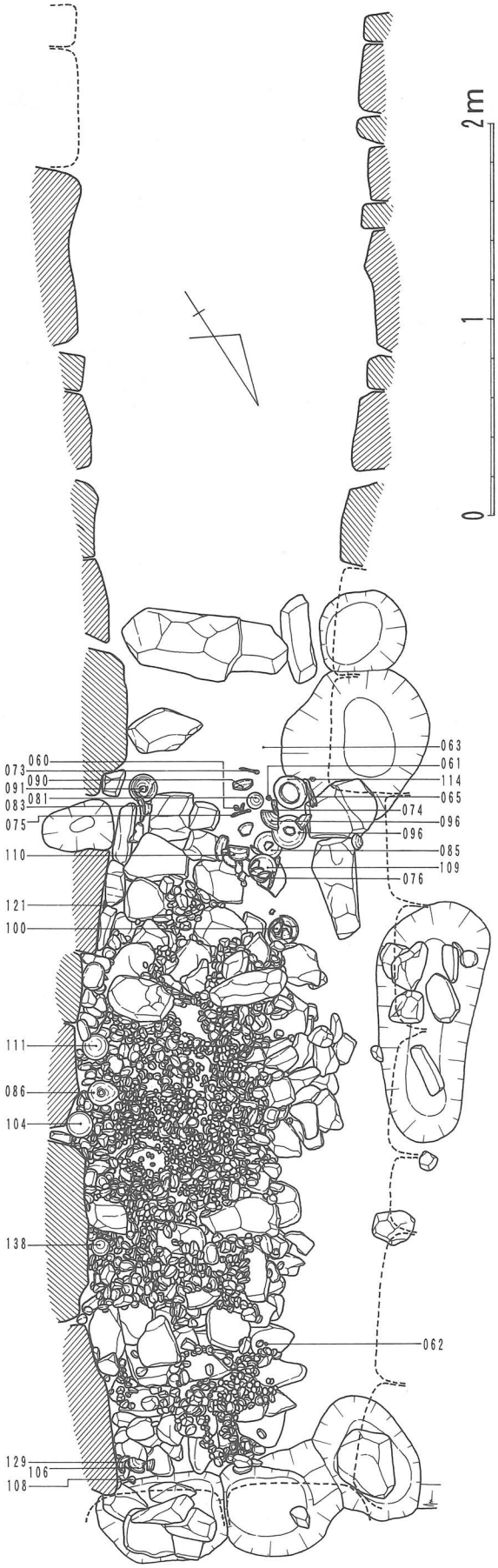
出土した副葬品は装飾品、鉄器(馬具・武具)、須恵器、土師器であり、いずれも７世紀前半代のものである。以下この種類別に掲載し解説する。

(64頁以降参照)

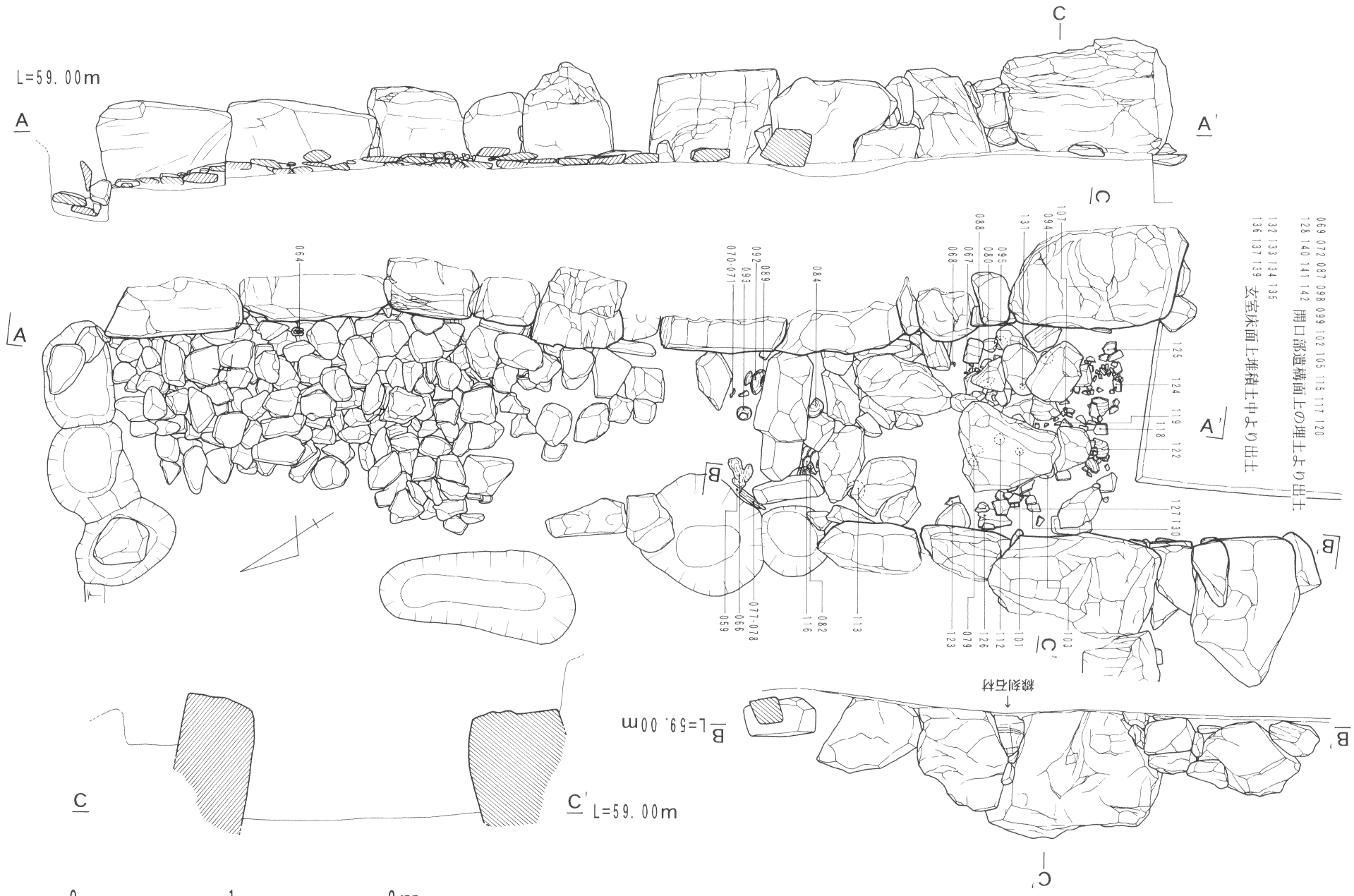
また、後世の侵入者が残した土器類は最後に掲載した。



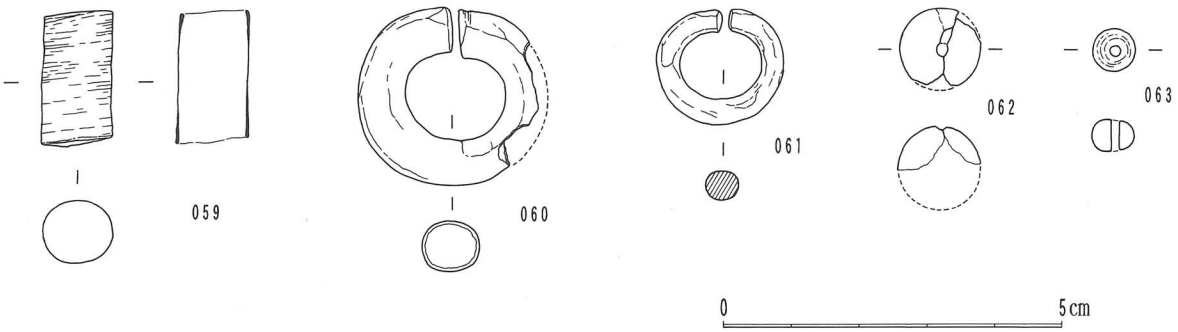
第85図　２号墳検出状況（全景）南西から



第86図　２号墳横穴式石室床面実測図（玄室礫床上層及び基底部）

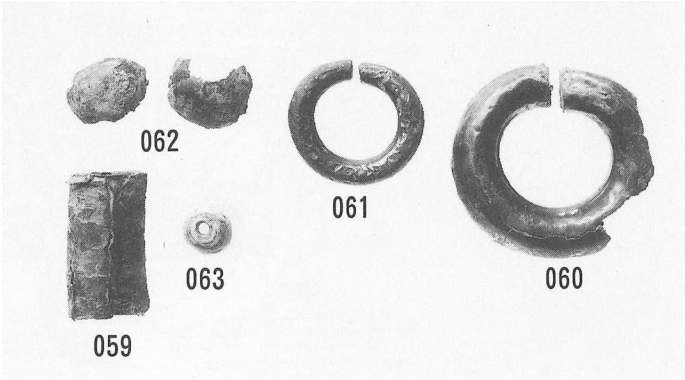


第87図　2号墳横穴式石室実測図（玄室礫床下層及び羨道部遺物出土状況）



第88図　2号墳出土装飾品実測図

装飾品　059は玄門付近に二次的に集められた遺物群中、轡金具と鉄鏃の下から出土した小さな筒型の金属製品で、厚さは0.1～0.2㎜程度と極めて薄く精巧な造りであり、表面には樹皮状の付着物がみられる。一方の縁はやや肉厚となっており、銀製とみられることから装飾品として分類したが用途は不明である。



第89図　2号墳出土装飾品

060と061は玄門付近で出土した銀環である。060は銅板に厚い銀箔を巻いたもので、061は銀無垢である。いずれも保存状態は良好で銀の光沢が保たれている。

062は玄室中央の礫床直上から出土した銀製の球形空玉である。出土は一部である。保存状態は良好である。063はガラス玉であるが、古墳時代にはあまり見られることの無い白色を呈している。また、このガラス玉は玄門付近に二次的に集められた遺物群中からの出土であり、後世の遺物の混入である可能性も考えられる。

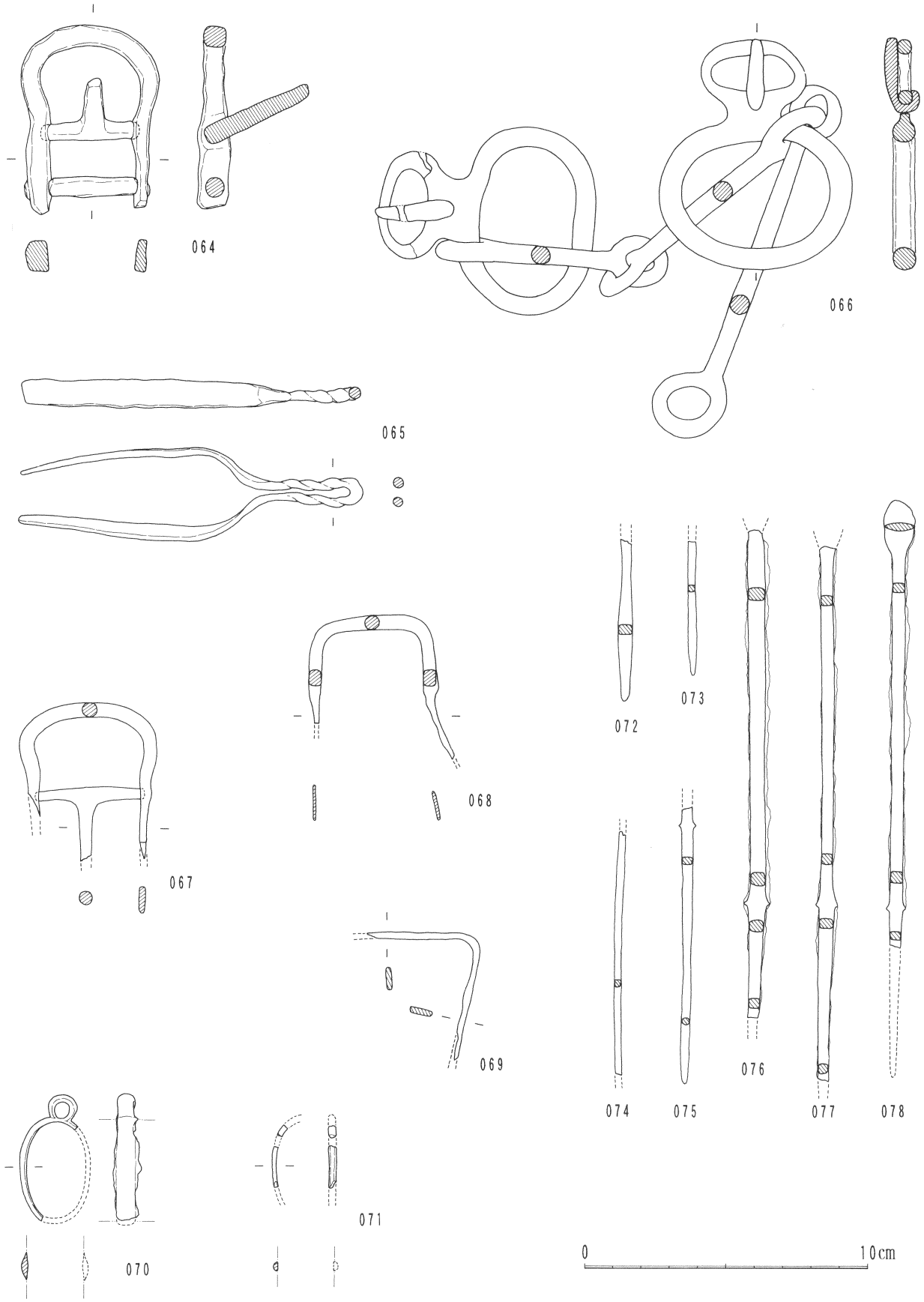
鉄製品(馬具)　064は玄室礫床中から出土した鉸具である。066は玄門付近に二次的に集められた遺物群中から出土した轡金具で、片方の引手が失われているが、保存状態は良好である。067～069も鉸具や馬具の一部とみられる。

鉄製品(武具)　武具と認められるものは072～078の長頸鏃であり、077と078は2本が並べた状態で癒着して、轡金具と共に出土した。その他の鉄鏃はその周囲に散乱していた。
077・071の刀装具もその周囲から出土しているが、刀本体は認められない。

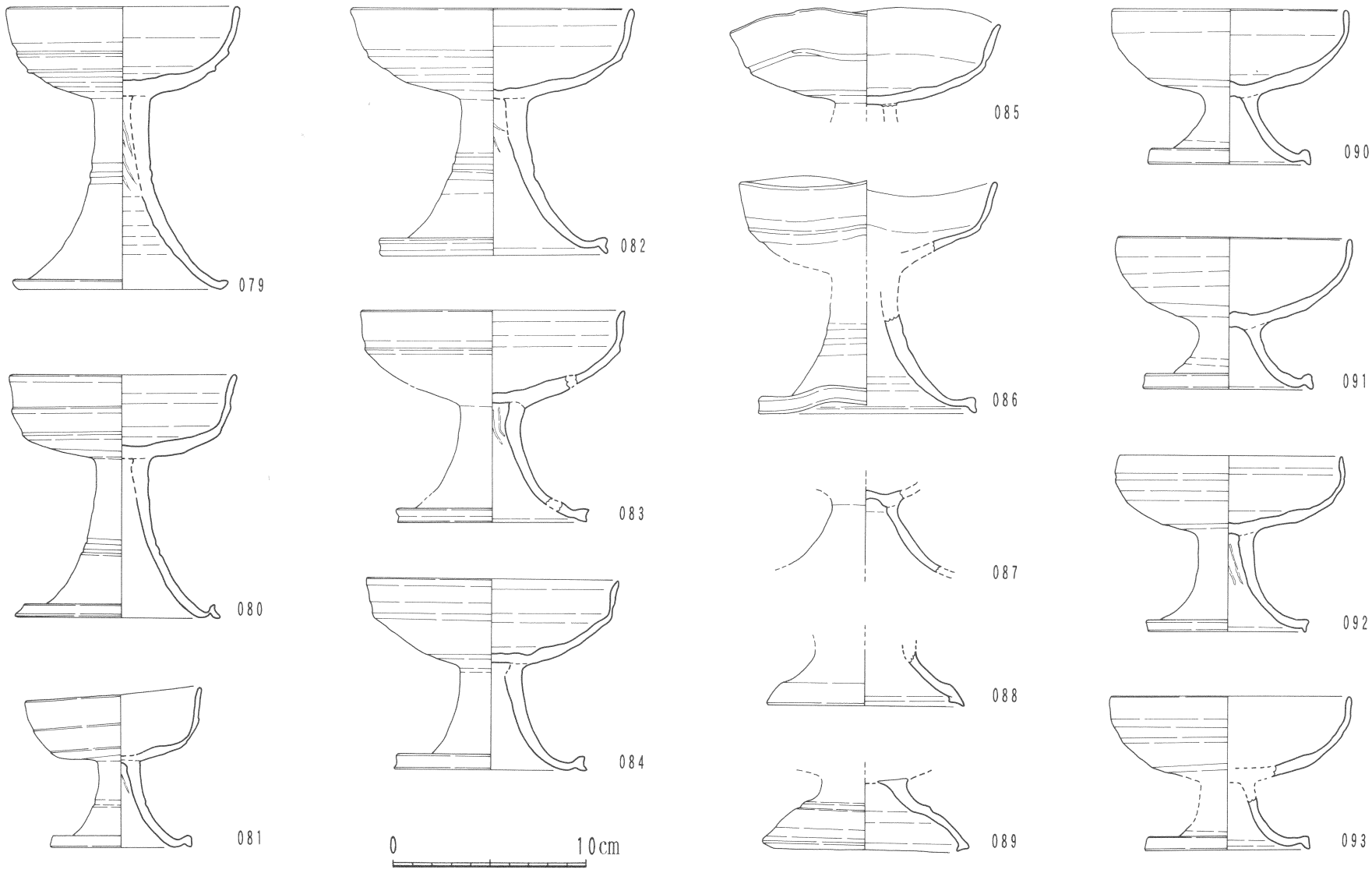
鉄製品(その他)　065は玄門付近に二次的に集められた遺物群中から出土した鉗子状鉄器である。完形であり県下では初の出土である。

土器　079～125までが副葬品とみられる須恵器、026～031が土師器である。いずれも7世紀前半代、宮が尾古墳とほぼ同じ時期の遺物である。126の甑と131の蛸壺は珍しい出土例である。

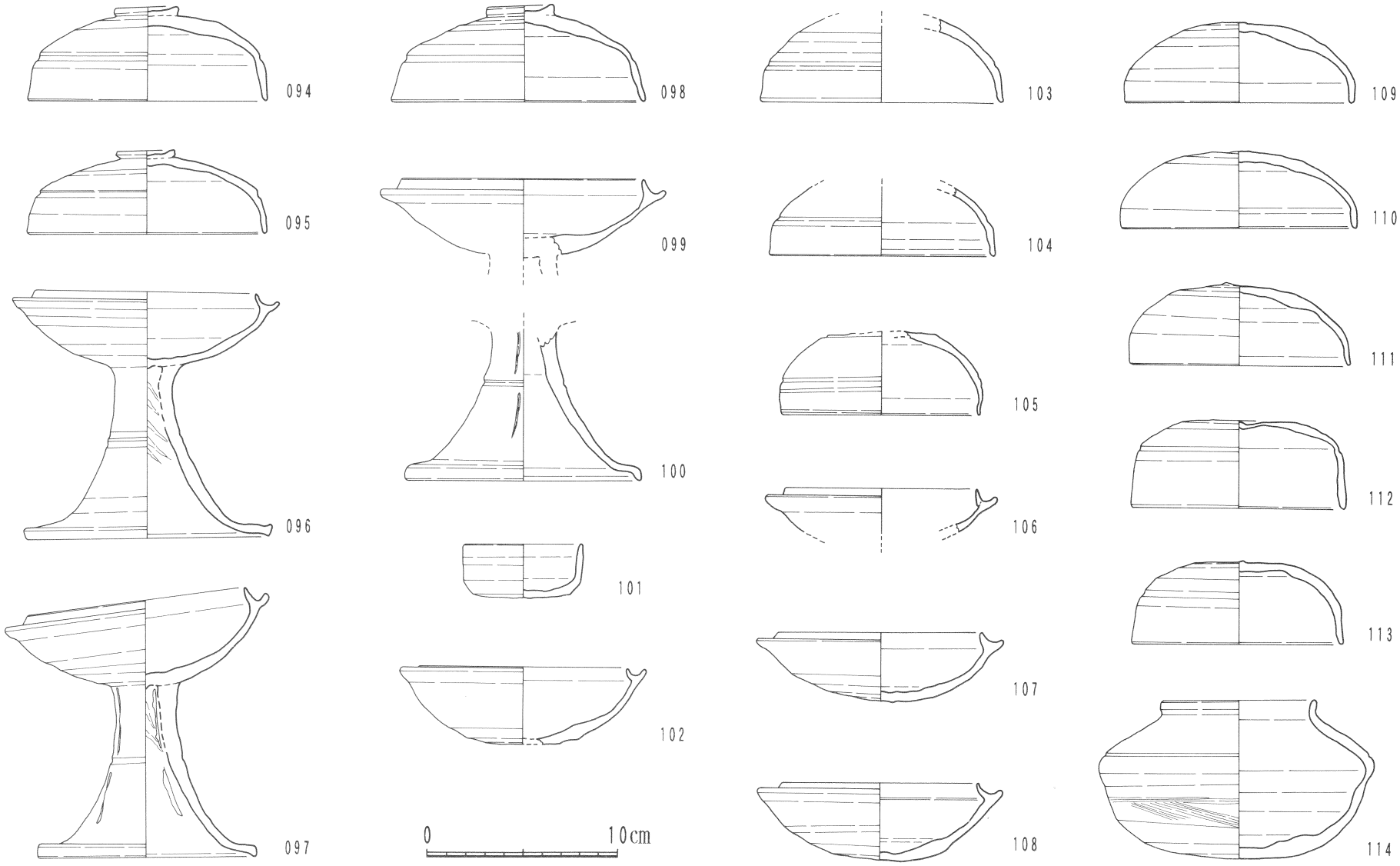
その他の土器　132以降が玄室や開口部から出土した後世の土器である。132～134は瓦器、135・136は黒色土器、137は瓦質土器、138・139は土師器、140は東播系捏鉢、141は須恵器(甕)、142と143は瓦質土器(大甕)の体部で同一固体と思われる。いずれも12世紀代の所産である。



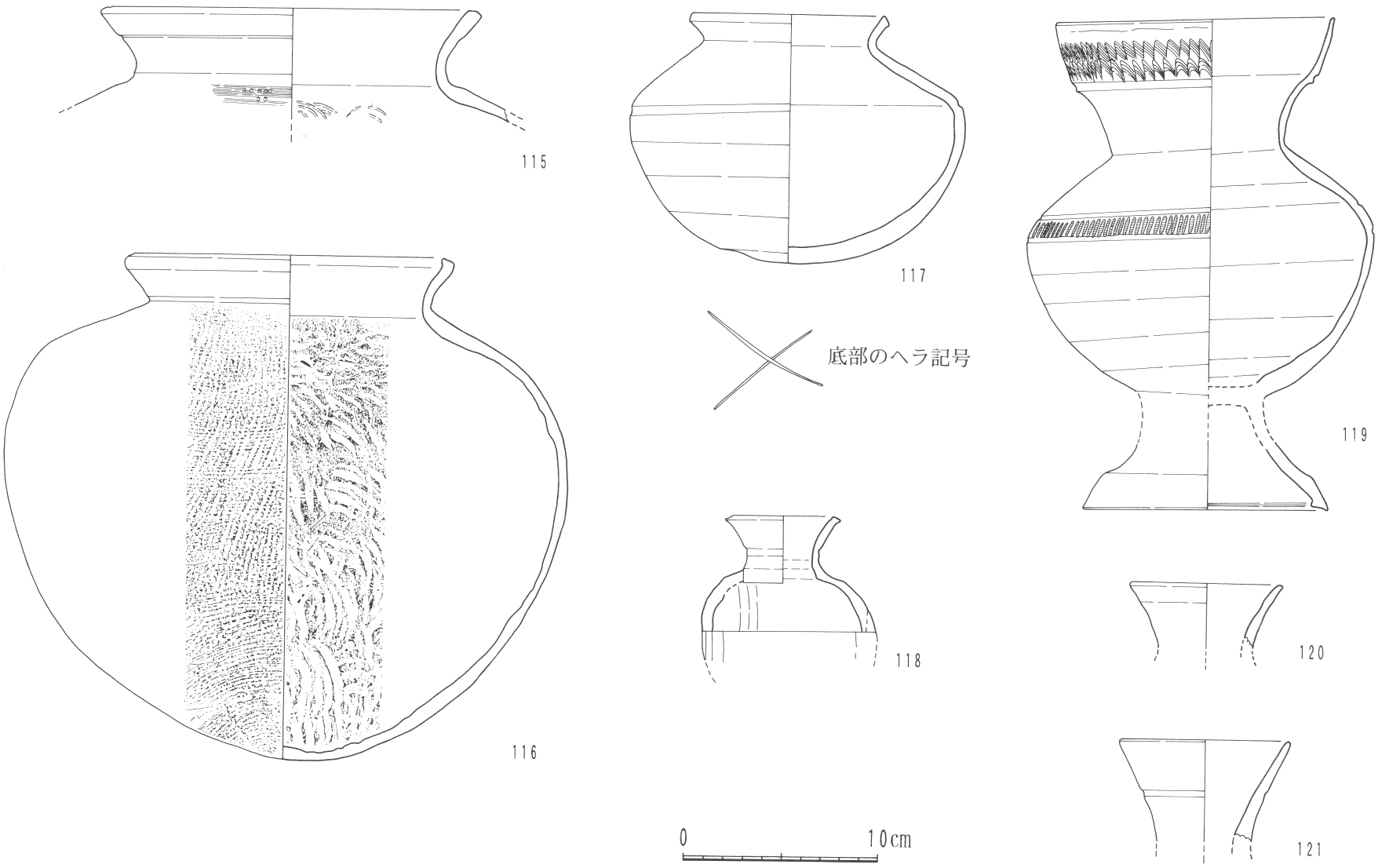
第90図　2号墳出土鉄製品実測図



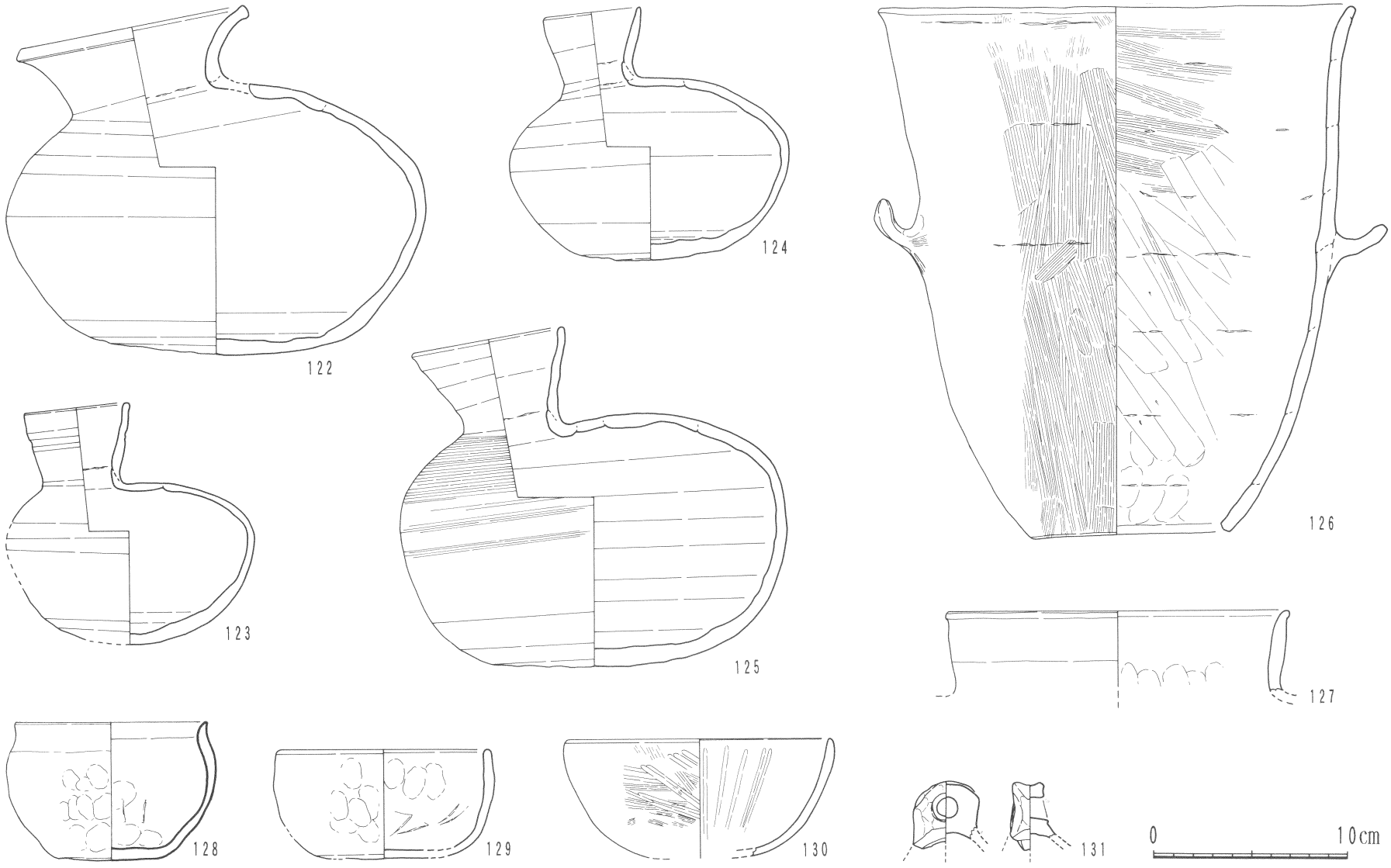
第91図　2号墳出土土器（須恵器）実測図①



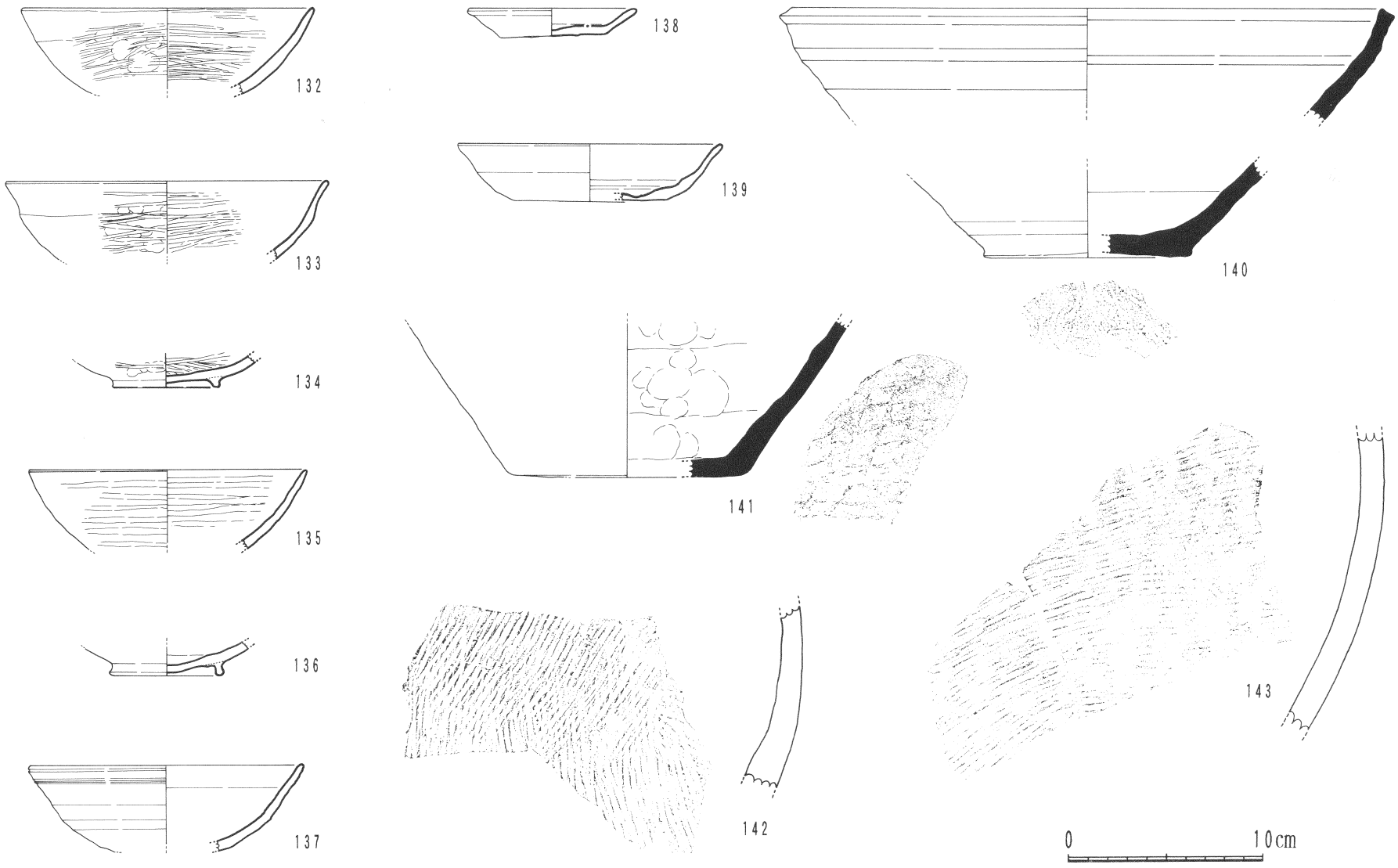
第92図　2号墳出土土器（須恵器）実測図②



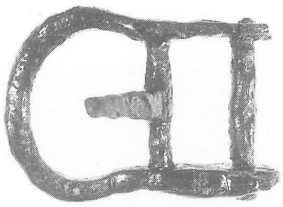
第93図　2号墳出土土器（須恵器）実測図③



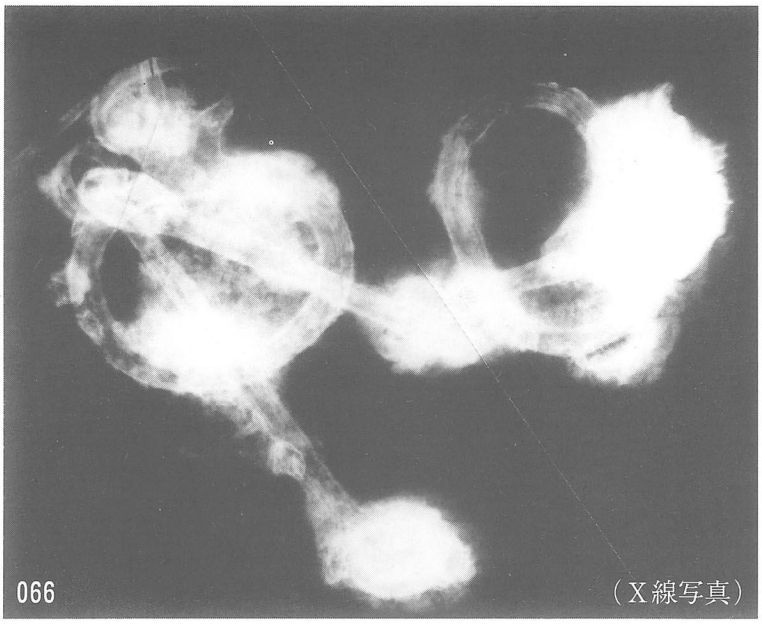
第94図　2号墳出土土器（須恵器・土師器）実測図④



第95図　2号墳出土土器（混入遺物）実測図⑤

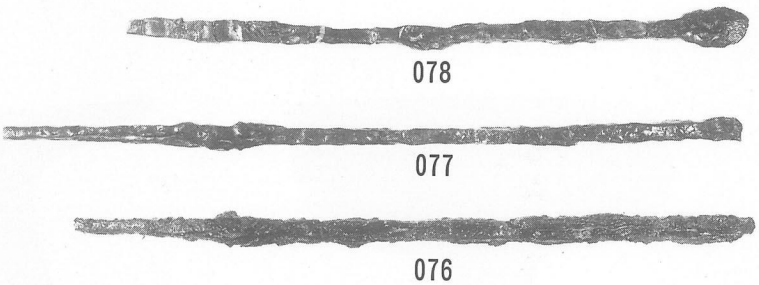


064 （保存処理後）

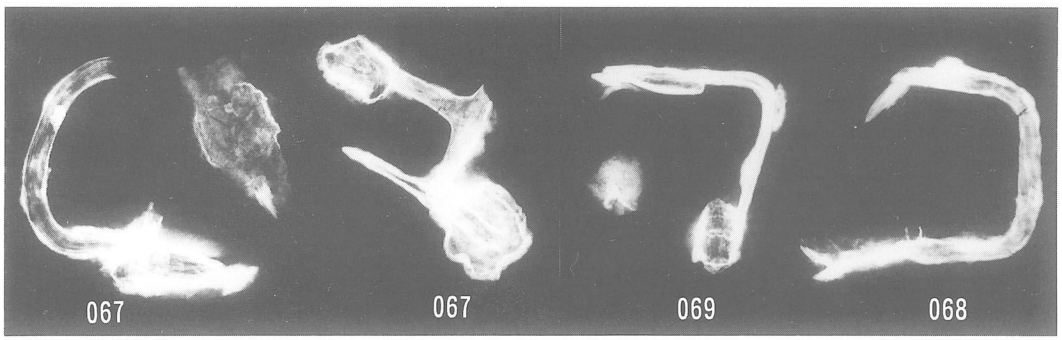


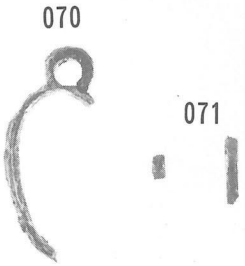
066 （X線写真）

065 （保存処理後）

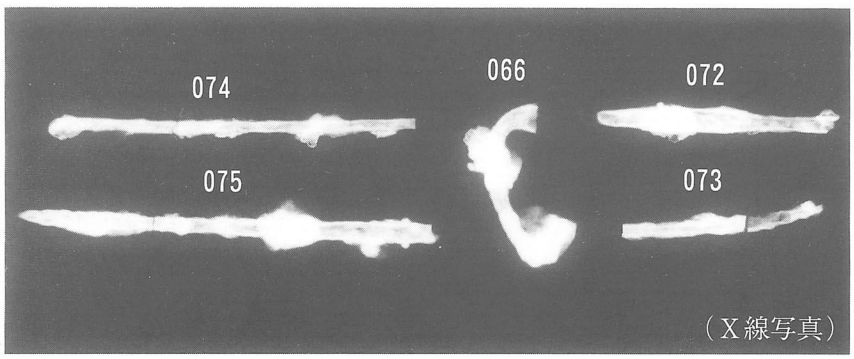


（保存処理後）





（保存処理後）



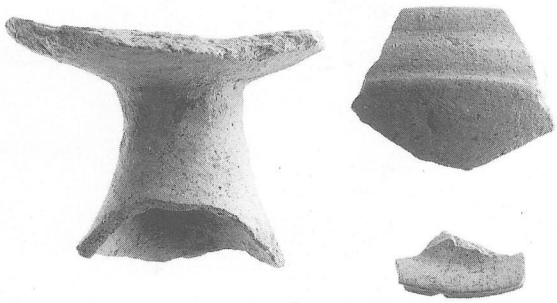
（X線写真）

第96図　2号墳出土鉄製品

079

082

080



083

081

084

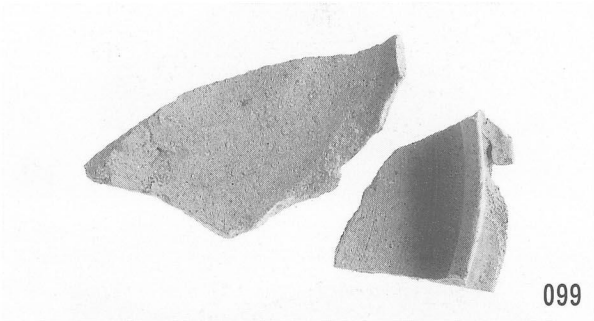
第97図　2号墳出土土器①（須恵器）

第98図　2号墳出土土器②（須恵器）

094

098

095



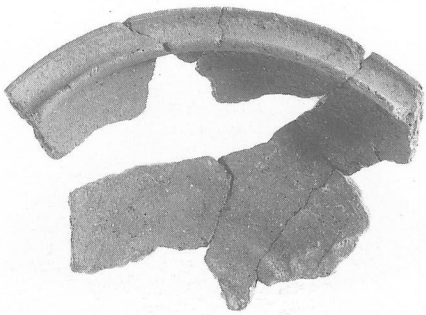
099

096

100

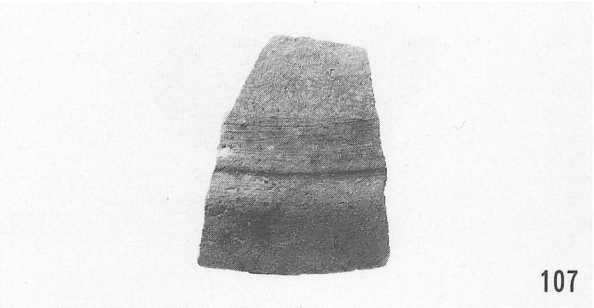
101

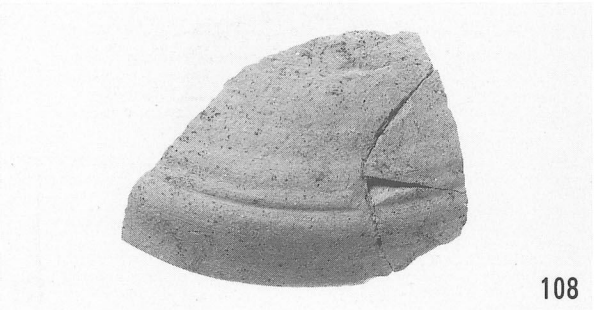
097



102

第99図　2号墳出土土器③（須恵器）





第100図　2号墳出土土器④（須恵器）

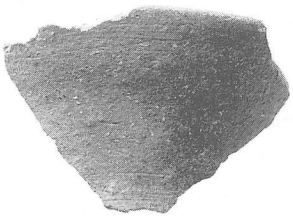
114

115

119

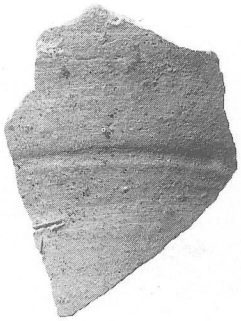
116

117



120

118



121

第101図　2号墳出土土器⑤（須恵器）

122

125

123

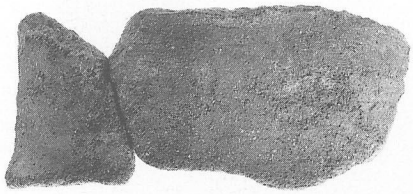
124

第102図　2号墳出土土器⑥（須恵器）

126

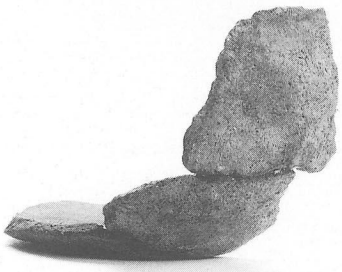
129

130



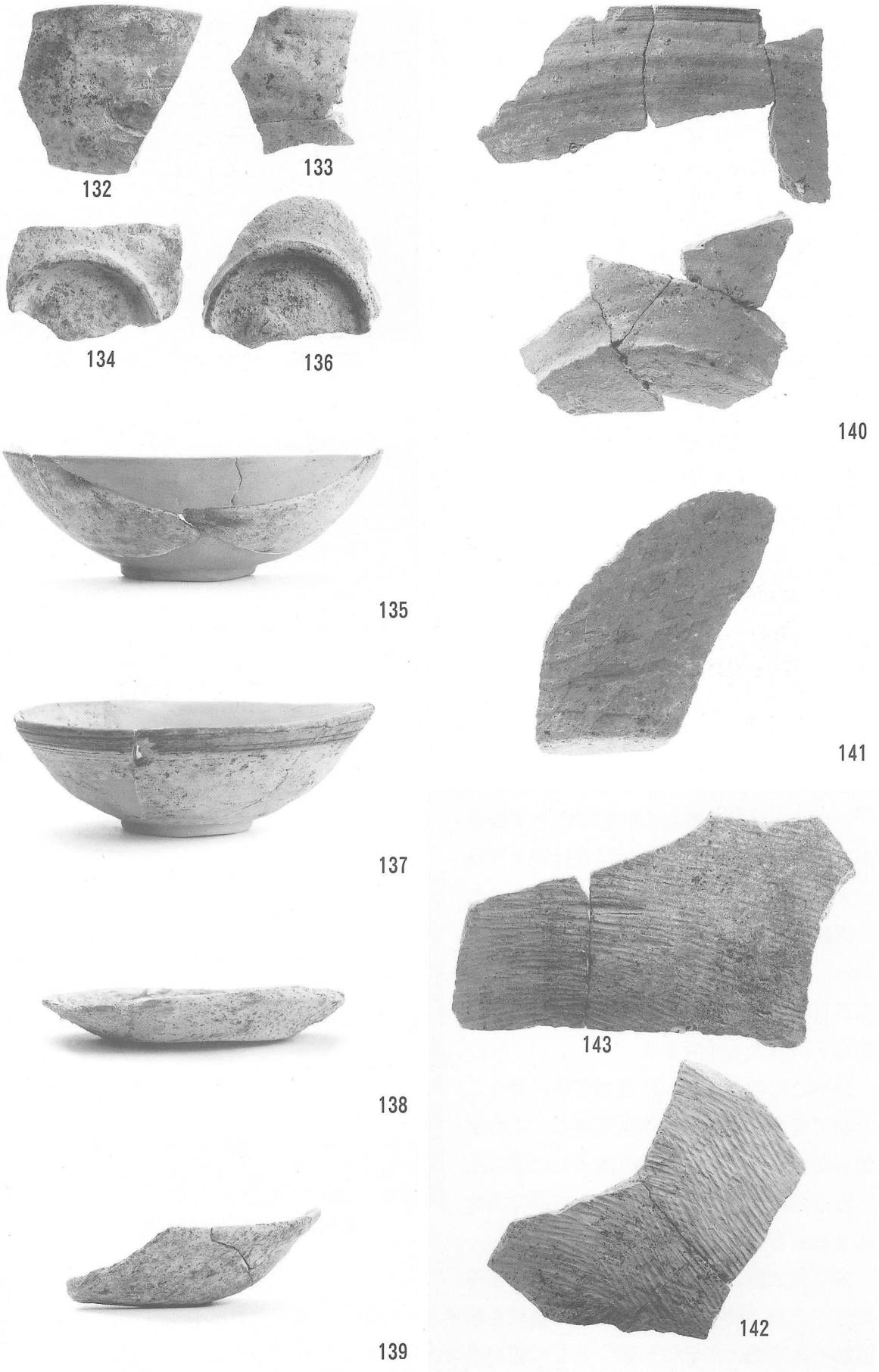
127

131



128

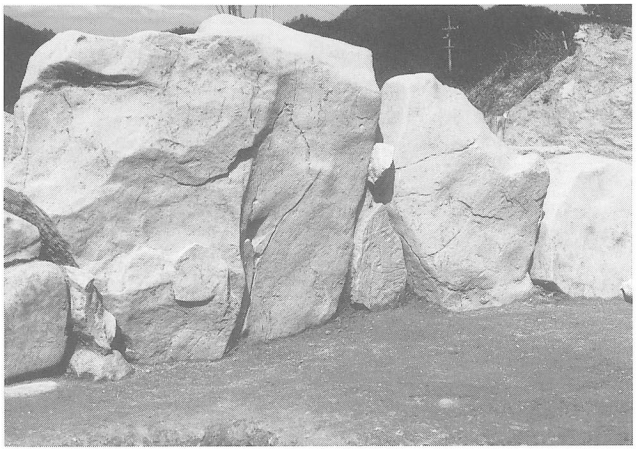
第103図　2号墳出土土器⑦（土師器）



第104図　2号墳出土土器⑧（混入遺物）

③新たな線刻石材の発見と宮が尾古墳墳丘出土線刻石材との接合

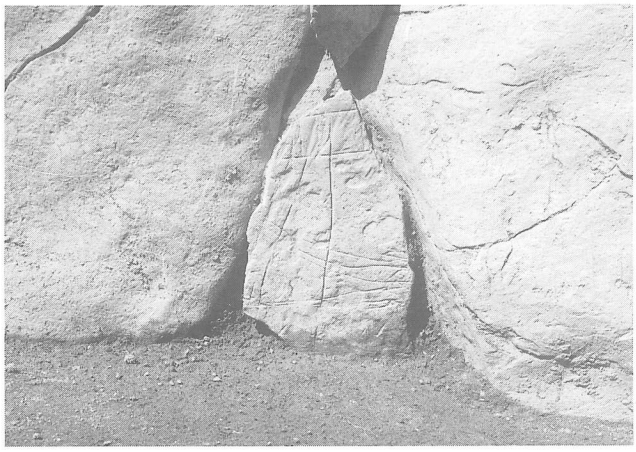
宮が尾２号墳は隣接する宮が尾古墳とほぼ同時期に構築されたと考えられた。従って、線刻画が描かれている可能性が高いと判断されたため、平成６年の発見時の調査及び平成７年度の石室全体検出作業では細心の注意を払って発掘作業を進めたところ、壁面を構成する大型石材に線刻画は確認されなかったが、羨道部の発掘調査中に、羨道北西壁中央部の巨石間に充填された小型石材に線刻画が確認された。一見して船にも見えるがモチーフがはっきりしない。しかし、人為的に描かれたものであることは明らかであった。（第106図）



第105図　２号墳羨道北西側壁面

調査整備委員会で２号墳の整備計画が協議され、遺構は遺存状態が悪いため、石室及び墳丘の下部のみを復元し、石室は露天で公開されることになった。

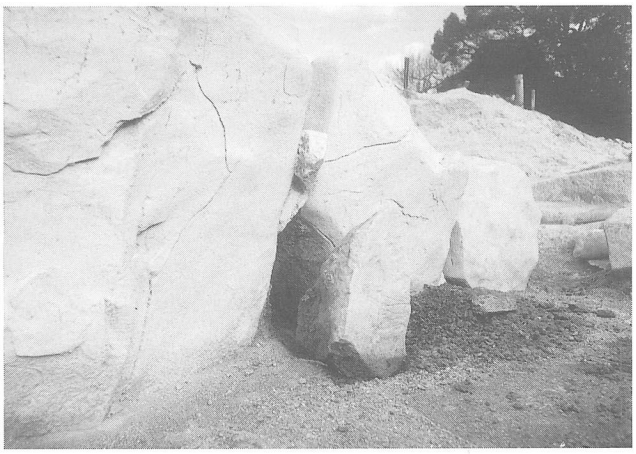
そこで線刻石材は取り上げて別に保存し、元の位置にはレプリカを戻すこととし、作業は宮が尾古墳開口部解体復元工事中に実施した。



第106図　２号墳羨道の線刻石材

レプリカは特に業者委託等は行わず筆者が作成した。同様の石材は現地付近で容易に入手できるが、不定型の自然石であるため同様の形状を得るためには加工が必要である。石材は堅緻で加工し難いが、復元する石材が小型であったことから復元模型の作成を試みたものである。

線刻石材の取り外し作業は容易に行うことができた。またその状況等から、この小型石材は両側の大型石材を設置した際に生じた三角錐型の隙間を充填する目的で填め込まれたものであることが判明した。



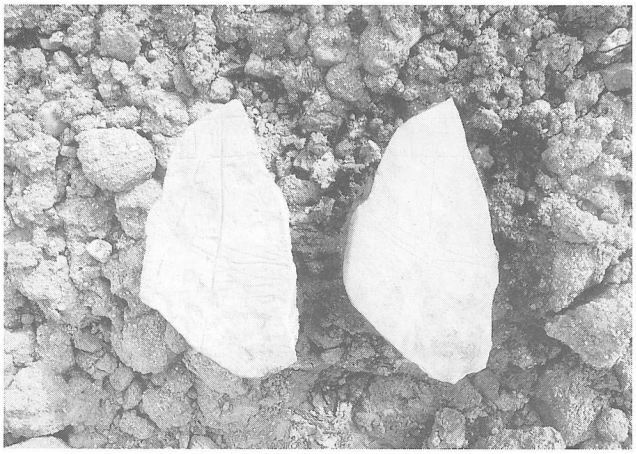
第107図　線刻石材取り外し状況

まず線刻画に描かれた面が似た石材を採取し、その周囲を加工した後に線刻画を模刻し元の場所に復元した。レプリカ作成の過程で、石材の破断面の形状や色調、そして線刻画の内容を丹念に観察したが、これが宮が尾古墳墳丘内部から出土した線刻石材の特徴に酷似していることに気付き、早速接合を試みたところ、線

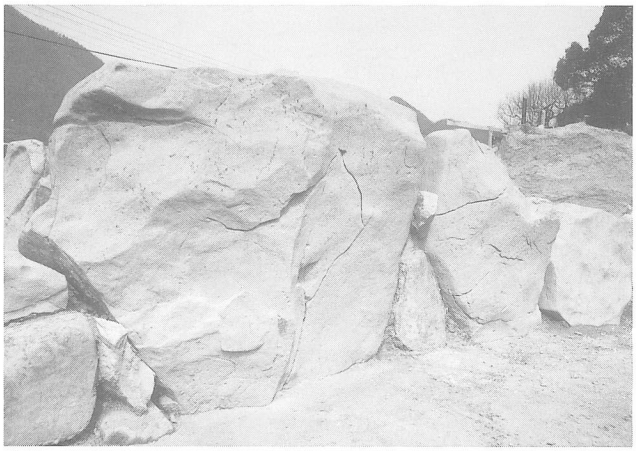
刻画を含めて見事に合致した。

これはこの二つの古墳が同時進行で同じ集団に構築されたことを示す重要な物証である。

宮が尾古墳墳丘内から出土した小型の線刻石材は、石室中段を積んだ際の墳丘盛土の土留めに転用されていることから、元の石材が破損したのは集石後で、最下段の石材を設置し終わる頃から次の段を積もうとしていた頃までの工程中のことと考えられる。また、宮が尾古墳の大型線刻石材は他の石材群と共に天井架設後の盛土の土留めに転用されていることから、多くの石材が天井石が架設されるまでの間は確保されていたのではないかと考えられる。



第108図　線刻石材レプリカ（右側）の作成



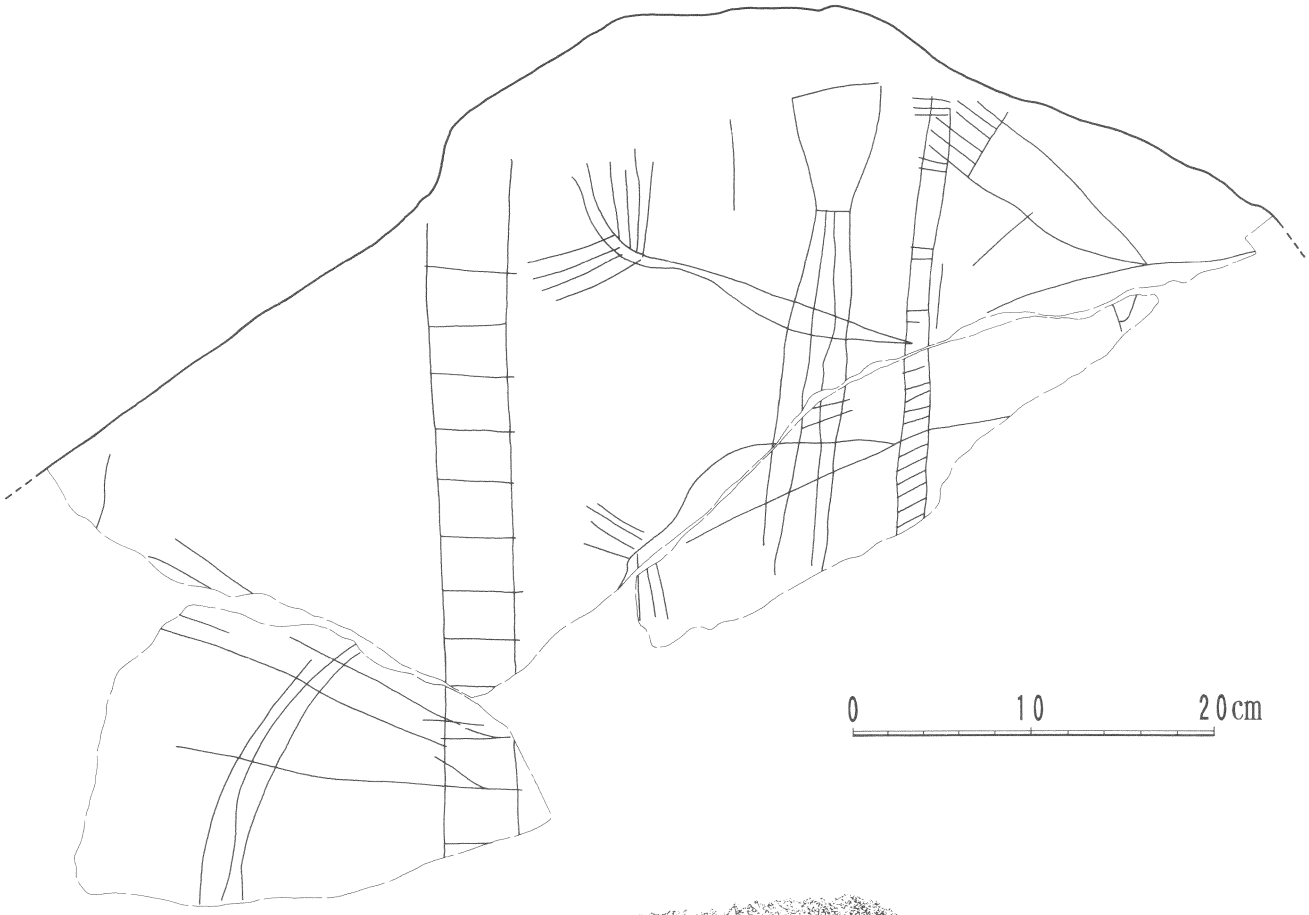
第109図　線刻石材羨道壁面への復元

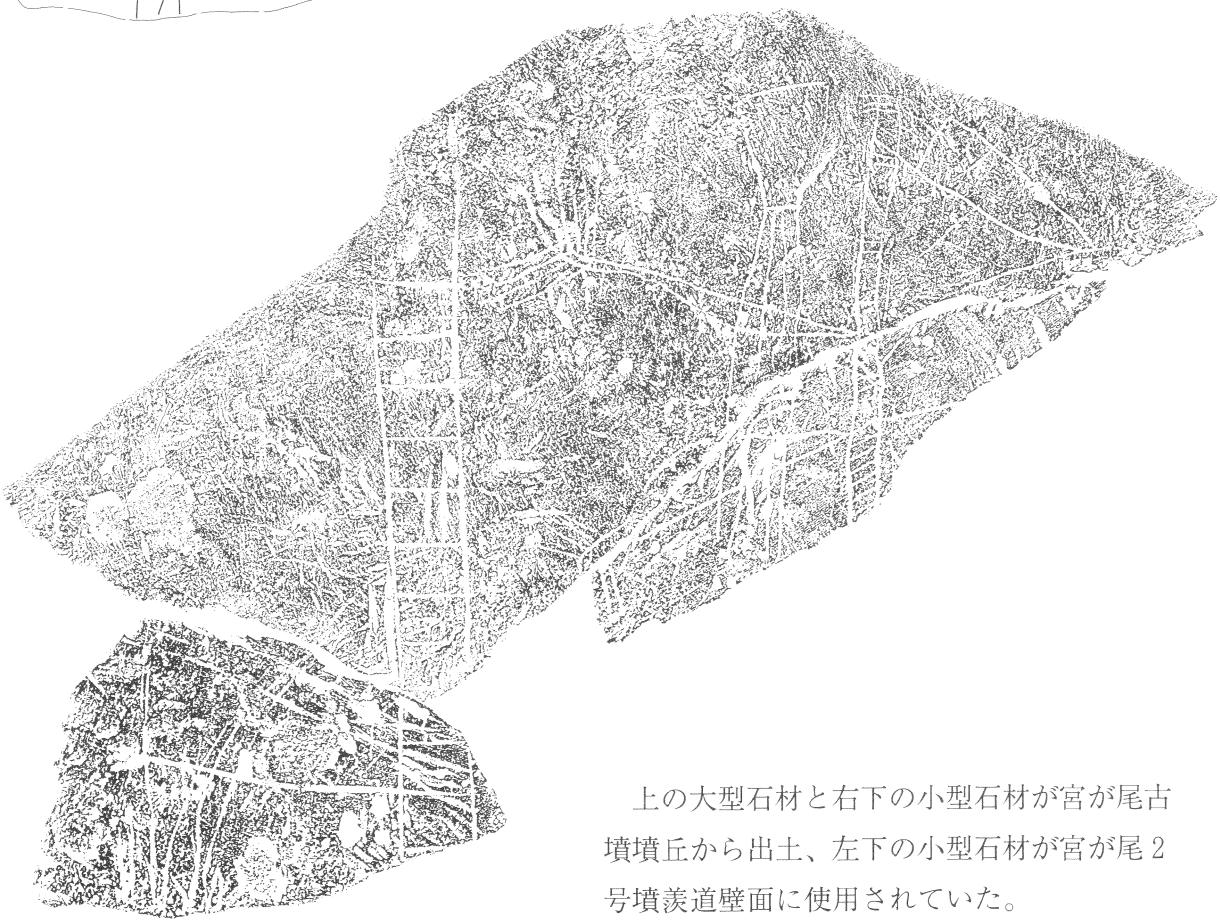
第３の線刻石材が２号墳に移動したのは、宮が尾古墳で線刻石材が破損してから天井石の架設が終了するまでの間であり、この時２号墳では少なくとも羨道基底部石材の設置が完了しており、巨大な石材と石材の間に生じた隙間に適当な石材を詰めて、壁面が概ね平坦になるように調節する作業が行われていた頃と考えられる。

さて、平成元年度の王墓山古墳横穴式石室解体復元工事と今回の宮が尾古墳・宮が尾２号墳解体復元工事では、失われている箇所を復元する際に現場の集石場の中を歩き廻り、次に積む石材や石材間の隙間を埋める形状に合った石材を探す作業を体験したが、同様の行動は石室構築の際には頻繁に見られた光景であろう。

ただ、ここでは宮が尾２号墳羨道基底部の石材間に隙間なく納まる石材片は、隣で同時に構築されていた宮が尾古墳の構築現場にあったことが、両古墳の同時構築を証明する結果につながったのである。

古墳時代後期末に造墓階級の拡大に伴う被葬者の増加によって登場した群集墳は、それまでより更に計画的に造営されたと考えられている。従って群集墳中には同時構築された古墳が多数あって不思議ではないが、一墳二石室以外で同時構築が確認されたのは本件が全国でも初めての例となった。また、新たに発見された石材との接合状況や全体の破損状況を見ると、元の石材は最初に考えていたより更に大きなものであったようである。従って線刻画面も失われた部分は大きいと考えられ、この下部の様子が不明であることは誠に残念であるが、56頁で述べたように残る線刻石材の探索は現状では行わない。以下、接合された石材の線刻画について説明する。（写真はカラーグラビア⑥参照）





上の大型石材と右下の小型石材が宮が尾古墳墳丘から出土、左下の小型石材が宮が尾２号墳羨道壁面に使用されていた。

第110図　線刻石材接合状況実測図・拓影